

---

# 人魔のはみ出し者

生意気ナポレオン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人魔のはみ出し者

### 【Nコード】

N4297Y

### 【作者名】

生意気ナポレオン

### 【あらすじ】

これは人からも魔族からも疎まれ蔑まれる、スライムの青年の復讐劇である…とか言ってみたりして、実際には色々あって超スライムみたいなものになった俺の日記みたいなものだ。まあ一つよろしく頼む。

これを書いた人はおよそ文章を書く力を持っていません。ドラエであればLV - と表示されていたであろう位無いです。よって

無いとは思いますが、過度の期待どころか少しの期待も禁物です。  
そんなこと言ってるのも誰も読んでくださらなくなりそうです。…そ  
れぐらい自身が無いもので(汗)

第世話話：左のタイトルは"せわ"じゃなくて"

どうも、生意気ナポレオンです。

今回生意気にも？世界観が何かの説明用の文を作らせていただきま  
した。

ええ、本文でも嫌と言うほど説明してるのにもかかわらず作りまし  
た。

本文よりは分かり易く…なってるはずなので、どうかよろしくお願  
いします。

第世話：左のタイトルは&quot;：せわ&quot;：じゃなくて&quot;：

どうも、生意気ナポレオンです。

今回生意気にも？世界観が何かの説明用の文を作らせていただきました。

ええ、本文でも嫌と言うほど説明してるのにもかかわらず作りました。

本文よりは分かり易く…なってるはずなので、どうかよろしくお願ひします。

世界に関して

・イメージ的にはオーストラリア大陸のような感じ、真ん中には”境の大山脈”と呼ばれる、巨大な山脈によって二つに分けられており、西側は魔族が住む”魔界”、東側は人間の住む”人界”となっている。

国に関して

五大大国と街が主、その下に小さな小国がある。

\*商人とギルドの街”ゲシヤフト”

・名前の通り商人とギルド加盟人が目立つ、その理由はこの街が全ての国のほぼ中心にあり、商人同士の交流、ギルド間の情報交換、門を開く際に戦争に加わるギルド員の中継地、仕事の豊富さの為、

## 人魔大戦について

- ・名前の通り人間と魔族間での戦争で、およそ五十年ほど前から始まった。
- ・発端は門を開けるようになった人間側が門を開き谷を越え西側に侵入し、近くにあつた妖精族の森を奪つた為。
- ・西半分が魔族、東半分が魔物なのだが、中心に東西を分割する巨大な山脈が在る為、人間側には五つ、魔物側には六つある”門”を使つて戦争をしている。

## 門について

- ・”門”は人間側の”法律家”が使用方法を発見した。
- ・人間側が”門”を使用可能にするのにかかつた時間は八年。それ比べ魔族は僅か四年ほどで使用可能にさせた。その早さの理由は人間側の研究者を奴隷としてこき使つた為。
- ・”門”は座標を入力した後魔力を注入して”開門”する。 ”閉門”は魔力の供給を経つた後一日かけて行われる。この際お互いに帰り損ねた兵隊が森や洞窟、山などに残つていたりし、人間側ではギルドに依頼が来る。魔族側では奴隷や捕虜にされる。
- ・どちらの陣営にも主な国には結界が敷かれており、門を開くことは出来ない。
- ・門の精度では人間側の方が高く、結界が安定しているのは魔族側。
- ・門が人間側の方が安定している理由はそもそも”法律家”が使用可能にしたのであつて、魔族側あくまで後から劣化コピーのようなものだから。
- ・反対に魔族側の結界が安定しているのは結界には魔族側の魔術である、概念の注入の方が効率が良いのもあるが、四年間ずっと防戦一方で、守りの技術が発展したため。

## お金に関して

- ・銅貨、銀貨、金貨などが使われていたが1580年に”法律家”が造ったライゼシーゲルにより、ライゼカードと呼ばれるクレジットカードのみが一般的となり、単位も<sup>リス</sup>rizuとなった。
- ・一円11リスである。

#### ライゼカードに関して

- ・要するにクレジットカード。だが他に職業や許可証などの意味も含まれる。超便利カードだが落としたら大変だよね。

#### ギルドに関して

- ・国（街）が運営する何でも屋、国民（街民）とギルド加盟人との橋渡しの存在。
- ・契約に関して、守らなければならない事は。
- ・依頼料の二割をギルドに払う事。
- ・規則違反をした場合には厳罰が下る事。
- ・保険は聞かないという事。
- ・などがある。
- ・支給はライゼカードにされ、魔族の種族や数によって報酬が変わる討伐報酬、採取した鉱石や珍しい薬草などを持つてくることにより貰える採取報酬、まだ明かされていない土地の地図を書くことによつて得られる探検報酬などのサブ報酬と、そもその依頼料の八割が手取りとなる。

#### 魔術に関して

- ・魔術は殆どの種族が持っている魔臓と呼ばれる器官から生まれる魔力を元に行われる。そのため魔術はごく一部を除き、人間と魔族両方の種族で使える。
- ・戦時中という状況の為重宝されるうえ、努力が結果として見えやすいという理由から人気の学問。

・魔術には属性があり、基本的には火・水・土・風・雷・光・闇・無の八種類である。

それぞれの魔術は人によって得意な属性はあるもののどの属性でも習得は可能。

・世の中には秘術と呼ばれるものがあり、基本的には秘匿されている。だが唯一教会だけは水と光の混合魔術である”救世”の魔術を一般向けに公開している。

・魔物側と人間側で魔術の様式は違う。

#### \*人間

・詠唱魔術と言われる魔術様式。この様式で最も重要とされるものはイメージ力で、詠唱はその補助の為にある。よってイメージ力さえあれば詠唱なしで発動できるが、ほとんどの物は効率が悪い為詠唱を用いる。

・また、詠唱魔術は魔力事態を操っているため応用が利き、効率もよい。だが、習得までの時間は魔族側の”概念魔術”よりもかかってしまう。

#### \*魔族

・概念魔術と呼ばれる魔術様式。この様式でもイメージ力は重要だが、それよりも重視されているのは知識である。自分の使う概念についてどれだけの知識と持っているかが威力などに深く影響してくる。(例えば牛の場合、角などの外見だけの情報ではなく、赤い色を見たら興奮するなどの情報の情報を持っているとより強化される)

・概念魔術は特徴として詠唱が必要ない事が挙げられる。だが、概念自体に縛り付けられるために不自由が多く、応用が利かない。

#### \*要するに

・人間側が理論と暗記、8:2で放っているのに対して、魔族側は方法と暗記が1:9で放っているような感じである。



- ・魔力事態で攻撃を行うのは効率が悪い（無属性魔術は燃費が悪い）  
、なぜかと言うと、炎の魔術なら燃焼、土なら重量などの効果があるが、魔力だけでは何の効果もつかないため
- ・魔物側は概念をさらに植えつけ魔術とかしている、なので詠唱が詠唱が極端に短い、
- ・魔術師には魔術の用法により様々な資格がある。

魔術師の資格について

・魔創士

- ・魔力を物理的に固め、重量が無い武具や道具に出来る創成魔術を習得した者に与えられる資格。見た目が派手なので人気が高い。だが、習得難度はかなり高いうえ、センスが必要となる。

魔臓が無い者に関して

- ・ごく稀に生まれる魔臓が無い者は”異能者”と呼ばれ、何らかの特殊能力を持ち、寿命が300歳前後になる。
- ・体の老化は独特で、20歳までは普通の人間と同じで、それから五年に一度年を取るようになる。

魔法に関して

- ・古代人が使ってたと言われる魔術の祖、その効力は魔術などとは比べ物にならない。
- ・現代では魔法を使えるものはおらず、古代人が残した道具でその

一端に触れられるのみとなっている。  
・小さいな物なら半年、武具なら三年、大きいものなら十年は解析に時間が掛かる。

病気に關して

・魔力欠乏症：魔力がからっけつになつていゝ事。僅かだが死亡する可能性がある。らしい。  
・魔臟發達障害症：三歳〜五歳ごろに發症する。先天的な病気で生まれた時に發症するのが分かる。現在治療方法は無い。

第世話話：左のタイトルは&quot;世話&quot;じゃなくて&quot;

実は細かい所で設定が変わってたりするので「本文と違うじゃないか！」と言う所があったら、教えていただけると助かります（汗）

## 第一話：爺と回想（前書き）

どうも、始めましての方は初めまして、方が一お久しぶりな方は申し訳ありませんでした。生意気ナポレオンです。

この物語では「」は人間の言語、『』は魔物の言語である事を表しています。

分かり難くて申し訳ない（汗）それでは、「人魔のはみ出し者」をどうぞ！

## 第一話：爺と回想

ふと目を開けるとそこには見知らぬ天井があった。そんなお決まりみたいな事を思ってみる。

まあとりあえずと状況を確認するために体を動かそうとしてみる。が、体の節々に激痛が走り、中止せざるを得なくなる。…節々？

なんで節々なんてものを俺が感じるんだ？

一つ違和感を感じると、その違和感が全身に広がる。

腕や足、そんなものがあるように思えてしまう。そんなものは俺にはないはずだ、多分。

…いかに酷く記憶が混乱してる。ここは一つ簡単な事から順に今までを振り返ってみよう。そこ、うわ不自然に説明に入ったとか言わない。

取り敢えず名前は…ルフト、そうルフト。ゼーレだ…よな？

性別は雄、歳は丁度十七歳だった。そして種族はスライムだった…はずだ。

その姿半透明につきスライムの全てと言える”核”が丸見え、その弱さと外見故に魔族からは罵られ、人間からは淘汰される。そんなものが俺だった。

…言ってる悲しくなってきた。だがまあ本当の事だからしょうがない。それで…確か両陣営に見付からない隠れ里でひっそりと穏やかに暮らしてたんだよ。

つても穏やかに暮らしてたらこんな事にはなって無いわな、という事は何かあったんだらうけど…

そう！あいつ等が来やがったんだ。確か二週間ほど前かな？スライムの天敵と言ってもいい妖精族の奴らが。

妖精族は俺達の事をごみくずのようなものだと思ってるやがるからな、気持ち悪いから死ね、弱いから死ね、とりあえず死ねと何人の同族がやられたか…！

ふう落ち着け、とりあえず振り返るのが先だ。そして…あいつ等は散々俺達を罵った後一枚の紙切れを残して行ったんだった。

確か内容は『戦争に出兵しなければ里を潰す』そんな感じだった、妖精族は魔術こそ強いものの体は魔族の中でもかなりひ弱な分類に入るからな、大方魔術を放つまでの時間稼ぎに使おうとしていたのだらう。

まあその妖精族よりも俺達は脆いんだが、そんなこんなで出兵する奴らが抽選で選ばれたんだ、そして運悪く出兵しなければならなくなつて…

「どうしてこうなつてんだ？」

『漸く起きたか』

「のわっ痛！」

『余り動かぬ方が良いぞ、お前さんの体はボロボロなんじゃから』

「あ、あんたは？つていうか…俺、今なんで…喋れてるんだ…？」

『ふむ、儂の時よりも重症の様じゃの』

「へっ？」

『取り敢えず落ち着くのじゃ、ほれ深呼吸、深呼吸』

「あつああ、すう～はあ～すう～つていやそうじゃなっ痛～！」

『だから、落ち着けと』

「いやいや、落ち着いてられるか！俺はスライムだったはずだ！なにになんで人間の言葉が喋れてんだよ！」

『いや、そういう事もあるのではないのか？』

「無いわ！とつとと状況を教える爺！」

『はあ～分かつた分かつた。今から話すからそこで黙って寝とけい。全く子供は枕もとで話を聞かせないとだまつとられんのじゃから』

「っ！このじじ…！黙れないのかの～』お願いします」

大いに文句が言いたいがここは我慢だ、我慢、頑張れ俺。

『ふむ、とりあえずここは何処かを教えてやろうかの。ここは”人界”側の境の大山脈、滝の裏に隠されておるスライムの隠れ里。名前をシャストと呼んでおる』

”人界”その言葉が生まれたのは今から五十年の事だ。五十年前のある日、ある妖精族の村に一つの”門”が現れた。

その中からは今は”人間”と呼ばれている当時では謎の集団が続々と出てきた。その集団に妖精族は呆然としている間に次々と捕えられ、”門”の向こう側に連れて行った。

その集団が全て”門”に帰って行ったあと、その村にはそもそも”門”などは出現しなかったとも言わんばかりに”門”は跡形もなく消えた。

これが五十年に渡り続いている、人間と魔族の戦争「人魔大戦」の始まりである。

全魔界スライム出版、スピルブルレアラー著より抜粋、そんな寝ぼけ眼で見ていた教科書の内容が思い出される。

「まあ今のお前にはこんな事よりも聞きたいことがあるじゃろう。うん？儂なら答えることが出来るぞ？聞きたいか？聞きたいんか？」

激しくイラツと来る。こいつ見た目はいい年のスライムだが間違いなく頭は七歳ぐらいだ。

「……………聞きたいです」

「あゝあ答えてしもうたのう。黙っておれといったのにのう」

ガキか！！くそ！体が自由に動くんだつたらこの老いぼれの人生を全うさせてやるのに！

「……………すいません。黙って聞きますのでお聞かせください。ご老人」

「何！儂はまだまだ若いぞ！ってそんな目でにらむでない、分かった話を進める、進めるから！その目は止めい！……………全く最近のスライムは礼儀と言うものを」

「なんか言ったか？」

「なんでもないわい！はあゝこの事言うのはいつも長話になるから嫌なんじゃよ……………なんでお前がそんな体になったかと言つとじゃなお主が”吸身”に成功したからじゃよ」

「吸身……………！」

「思い出したかのう、全く時間が掛かったわい……………さて、お主、何





のはもつと癩だ。

精々呪詛を念じながら殺されてやるとしよう。…正直に言うて恐い。ここまでペラペラと喋っておいてなんなんだが、俺は死ぬ前に寡黙になるタイプではなくむしる饒舌になるタイプらしい。

こうしてないと今にも無様に崖に落ちてしまいそうだ、ああ、多分今日の前の男の武器の射程圏に入ったよな、怖い…怖い、怖い！怖い！怖い！俺には最後まで相手の顔を見ながら死ぬなんてことは出来そうもなさそうだ。ギョツと目を瞑り、俺はその声を聴いた。

「全くだだ逃げるだけかと思っただら中々いい仕事してくれたじゃない。」盾「くん、それじゃあね、盾君。」

声が聞こえた方を見てみると、崖から少し離れた空中に紫の羽がけばけばしい妖精族がいるのが分かる。

「つくそ！死にやがれくそ妖精！」

「遺言はそれでいい？盾君、私は優しいからご家族に伝えてあげるよ。」

「けっ！それじゃあもう一言、喋り方気持ち悪いんだよ！お前！」

「っ！…それじゃあバイバイ。…溢れる濁流を纏いし燕よ。」トヴァーレ・シユヴァルベ。」

崖の付け根が水で出来た巨大な燕に蝕まれ破壊され、あっさりと崩れていくのが分かる。それを確認した後、俺の意識は吹っ飛んだ。

…意識が戻るとは思っただけでなかった、運よく俺を殺そうとした男がクツシヨンとなつて助かったみたいだ。

近くに俺と同じ様な方法でだろうか、生きている奴がいるのが分かる。

今になって思えば俺は運が良かった、もしこの時生きている奴がいなかったら俺は衰弱して死んでいただろう。今も生きていられるのは間違いなくこの時の奴らのおかげだ、まあ一切感謝する気はないが。

ここで突然なんだが少し説明をさせて貰おう。スライム族の秘術

に”吸身”というものがある。それはスライム族最大にして唯一の術であり、それと同時に使う際に及ぼすスライム族への危険も最大級である。この術は十六歳の時に親から”刻まれる”そう、スライムにとつての全てである核に”言霊”として刻まれるのだ。この術の特徴は三つあり、一つは相手を完全に溶かし、吸収する事。二つ目は相手が生きていなければ意味が無い事。三つ目は全てを吸収し終わるのに長時間掛かる事だ。この術の事を聞く際に一つ目を聞いて子供が目をキラキラとさせ、二つ目と三つ目を聞き絶望するのは恒例行事だ。それはそうだろう、生きてるままに長時間拘束する、それはスライム族には至難を超えて不可能と言っても過言ではない。故にこの秘術は永遠に秘術とされていなければならない、なぜならこのような力があると知られればスライム族は滅亡の危険もあるからである。

そう、俺は間違いなく”吸身”をした。恥ずかしい話だが俺はこの時、自分が生きる事しか考えてなかった、この様子が漏れでもしたらスライム族がやばいなんて事はこれっぽっちも考えなかった。がむしゃらに近くに居た人間を片っ端から吸身した後、俺は緊張がぶつつりと切れたせいか、直ぐに意識が無くなった。

### 回想終了、現実始動

「…そして、今ここで目が覚めたってわけだ」

『お主の話は大体分かった、だったら俺も腰を据えて話をさせて貰おうかの』

「腰を据えてつて…まさか、爺も!？」

『まあそういう事じゃの…』変化”』

目の前で皺くちななスライムだったものがグネグネと蠢く、初めに足、次に腰、そんな感じで次々と体が創られていく。十分もしただ

ろつか目の前には相変わらず皺くちなだがまぎれもない人間の年寄りが目の前にいた。

「さて、お主には同じ吸身した者 吸身者 の先輩として話をせねばなるまい。黙って聞いておれよ？」

首を縦に振る以外は出来る訳が無かった。

## 第一話・爺と回想（後書き）

自分で書いたいてなんですが露骨に説明入れて申し訳ない、さらりとああいう事を説明する程の力を持っていないもので…（汗）  
もし、少しでも面白そうと思ってもらえたら幸いです、読んでいた  
だいて誠にありがとうございました。

## 第二話：長老と核片

「初代吸身者は今より百五十年程前に誕生したと言われている、名前はグラフト」シユバンヘル。初代はスライム族の復権の為に死力を尽くしたらしいが、残念ながら達成は出来なかった」

「そりゃあそうだろう、個人の力でそんなことが出来るはずがない」

「いや、力と言う意味では間違いなく達成できる力があつたじゃろう。じゃが運が無かつた」

「つまり…病死つてことか？」

「うむ、ある時急に体がいう事を聞かなくなり、周囲に危害を加えるようになったと言われている。そして、初代はその事に危機感を抱き自身の核を砕き、刻まれていた五つの言霊を五人の弟子にそれぞれ分け与えたと言われている」

「五つ？」

「うむ、それぞれ”吸身”、”変化”、”圧縮”、”強化”、”分裂”と名付けられておる」

「おいおい、ちよつと待ってくれよ。言霊は一つ”吸身”しか伝わっていないじゃないか」

「その事なのじゃが、実はこの五つの言霊なぜか吸身以外の言霊は儂らの核じゃ刻むことが出来ないのじゃ」

「はあ？」

「つまり、じゃその初代の核の破片でしかこの言霊は刻むことは出来ん。しかも、もう一つ理由がある」

「なんなんだ？」

「それは吸身した者の核でなければ刻む際の負荷に耐え切れず、死んでいう事じゃ」

「はあ、それを聞いたら吸身の話を初めてされた時の絶望感を思い出したよ…で、ここにはどの言霊の核があるんだ？」

「その事なんじゃが、此処に来るまでの話を聞いていても思った

が、お主は儂と同じで運が良い」

「どういう事だ？」

「此処には”変化”、”吸身”二つの言霊があるのじゃよ」

### 三日後

三日後、俺は怪我也動ける程度には治り、爺と共に歩いていた。

「お主、もう怪我は大丈夫の様じゃの」

「ああ、お陰様でな」

「看護をしてくれたものに礼は言ったか？」

「当たり前じゃねえか…おい、爺、お前が俺をスライムだと見抜いて看護を頼んだんだってな」

「うむ、その通りじゃ。礼を言うべきじゃな！ほれ、早く言え！」

「オイ、今俺が照れながらも感謝の言葉を呟く感じだったのに、お前の所為で一氣に台無しなっただぞ」

「ふん、男が照れながらお礼を言うシーンなどに興味はないわい」

「…まあいい、助けてくれてありがとよ爺」

「うむ、感謝の気持ちは受け取らんから感謝の物を用意せいよ」

…この爺、シリアスな雰囲気も苦手だな？まあ俺も苦手だからいいんだけど。

「ああ、今度そこらの雑草まとめて届けとくよ。ところで爺、今更なんだが俺、あの傷でどうしてここまでこれたんだ？」

「うん？言って無かったかのう。お主、吸身を発動したあたりから記憶があいまいじゃろう？」

「そう言われてみたら…確かにそうだな」

「そうじゃろうの、これは儂が勝手に推論している事なのじゃが、恐らく吸身を発動したらその時点で意識を失い、最も近い初代の核片に引き寄せられるのじゃろう。儂の時もそうじゃったし」

「成程ね…ん？と言うか爺もこの近くで吸身したのか？」  
「そうじゃが…いい加減爺と呼ぶの止めにせぬか？この皆は敬意をもつて儂の事を賢者と呼ぶのじゃが？」  
「悪いが俺のあんたに対する第一印象はどちらかと言ったら愚者だ…だが確かに爺はあんまり良い言いぐさじゃいな。一応年上だし」  
「その第一印象には大いに文句があるが…まあ爺じゃなくなるのなら何でもいいわい」  
「…そうだ、長老にしよう、そんな見た目してるし」  
「長老…まあそれで良しとするかのう」  
「…ところで長老、さつきから歩いてるがどこに向かっているんだ」  
「それ位は察してくれんかのう」  
「いやまあ大体察しはついてんだけどな？確認だよ確認」  
「この流れで初代の核片の所以外に行くところなどなかるうに」  
「そりゃそうだ」  
そんな感じでもくだらない会話をしているとやがて目の前にいかにもな祠が現れる。  
どれ位”いかにも”かと言われるとちよつと返答に困るが。  
「此処が初代の核片が収められておる、”ウエントの祠”じゃ」  
「へ〜これがねえ、この扉開けてもいいのか？」  
「うむ、心してあけるのじゃぞ」  
「りょーかい、あらよつと」  
「軽いわ！お主、それはあれじゃぞ！？なんかこう、伝説の剣を抜く時とかそれっぽい感じで開ける所じゃぞ！？」  
「はいはい、っていうか長老、これ核片っていう割には俺達の核と見た目同じじゃねえか」  
「はいはいってお主の〜！…はあ、それはじゃのう、その核片が弟子たちの核に溶け込んだからと言われている」  
「ふ〜ん、うでこれに触れればいいんだろ？」  
「さつきからお主、間違いない儂に喧嘩売つとるじゃろう？ん？本当の事を言ってみい怒るから」

「売ってない、売ってない。それよりも早く教えてくれよ」

「もう儂泣いてもいいかな？ああ！そうじゃその核に触ればよいのじゃ！」「りょうかーい」正し、同時に触れては…って！」

「おい、長老。触っても何も起きないぞ。それとも、あれか？もう俺その変化とかいうやつ出来る様になつたのか？」

「お主…体は何ともないのか…？」

「ああ、なんともなつ！？ぐうがあああああ！！」

突然、核を少し尖った石で削られるような、荒々しく力任せに削られていく。

体を激痛が支配する。だがしかし、核はそこにあつて歓喜に打ち震え、快感に悶えている。

”何か”が核に侵入し、俺に掛かる負担を微塵も考えもせず、俺を縛り付けている鎖を力任せに引き千切っていくのが分かる。

恐らくこの”何か”はその為だけに生まれれた存在なのだろう。そんな事を考えながら俺の意識は無くなつていた…

ふと目を開けるとそこには見知らぬ天井があつた。

そんなお決まりみたいな事を思つてみる。状況は分かっているが周囲に誰かいないかと体を動かそうとする。が全身に激痛が走り、中止せざるを得なくなる。

さて、今までの事を振り返つてみる。「やっと起きたか！この馬鹿者が！」暇は無く、長老が肩を怒らせてこちらに來た。

「どうしてこうなつてんだ？」

「お主が馬鹿をやつたからじゃ！」

「馬鹿？」

「そうじゃ！普通吸身してなかつたら死ぬなんてものに二つ同時触れんわ！」

「いや、そういう事もあるんじゃないの？」

「あるわけ無からう！」

「まあ落ち着けよ長老。もしかしたらこれが契機で”あの時の失敗



「がここで役に立つとわな！」みたいなことが…」

「…はあくもう良いわい。お主いくら説教しても無駄みたいじゃの…」

「長老、やっと分つてくれたのか。全く物わかりが悪いんだから…」

「…突っ込まんぞ」

「はいはい、了解。ところでその…」変化”と”圧縮”はもうできるのか？」

「出来る。お前の核を見てみたらしつかりと刻まれておったわい」

「成程。だったら早く核直して鍛錬しねえとな」

「鍛錬？なぜじゃ？お主、”変化”の言霊があればスライムの姿に戻るのじゃぞ？そういう意味でも儂は運がいいと…」

「えっ？ちよつと待て、もしかして変化が出来なかつたら、元の姿には戻れなかつたのか！？」

「そうじゃぞ、吸身したものの姿で固定される」

「本当に運が良かったんだな。ここじゃなかつたら帰るのにさらに時間が掛かるところだった」

「帰る？」

「ああ、帰るんだよ俺の里に」

「お主、本気で言っておるのか！？」門”を通り、魔界に戻って里に帰ると？本気で？」

「当たり前じゃねえか、俺はこつ見えて地元大好きなんだぜ」

「…お主、痛みで頭がおかしくなつたんではないのか？」

「失礼なこと言うなよ、俺は正気だ」

「いいや、やはりおかしい。”門”を通るといふ事はこの山を下り人の兵隊に加わるといふ事じゃぞ」

「まあ確かにちと大変だろうが…」

「ちよつとでは無い！いいか、兵隊に入る者は身分を証明しなければならん。だが儂らにそんなものは無いのじゃぞ？つまり不可能といふ事じゃ」

「おいおい、長老、同じ吸身者なんだから誤魔化そうたって無駄だ

ぞ・教科書には”吸身は相手の身体を吸収する”なんて書いてたが  
ありゃ嘘だな・こう訂正するべきだ”吸身は相手の体と記憶を吸収  
する”ってな

「お主…もう…!」

「大体人間の言語が使えてる時点でもしかしてとは思ってたんだよ  
そう思ってたちょっと思い出してみたら、思った通り初めて聞くよう  
な知識ばかりがうんざりする程思い出せる・そして、その知識は  
言ってるぜ身元不明の奴でも”門”をくぐる事は可能だったな」

### 第三話：帰郷への覚悟と人界の知識（前書き）

今回は超説明回です。本当に申し訳ない。だけど、序盤なのでどうしてもこつなっちゃうんです。どうか、生暖かい目でお読みください。

### 第三話：帰郷への覚悟と人界の知識

「思い出すところによると…人間の社会には”ギルド”という物があるんだろっ?」

「…うむ」

「ギルドとは国が運営する何でも屋、一般人とギルド加盟人との橋渡しの存在。」

ギルドに加盟する条件は一つ犯罪歴が無い事、つまり身分不肖な俺でもなれるっていう事だ。そして、このギルドの目的は、ただ国民の依頼を解決してその一部を税収とする事じゃない、実際の目的は兵隊の育成、兵士の育成っていうのには時間と金がかかる、しかも訓練と実戦じゃあ大違いだ。しかし、しかしだ、このギルドの仕組みを利用すれば、金が掛かるどころか儲かり、兵士は実戦で鍛えられた経験と実力を秘めた良い兵士が出来上がる、おまけに民衆からは喜ばれる良い仕組みだよな。

そして、ギルドに入っている程度の実力を付けた奴は依頼と言う形で出兵してもらう、依頼料は掛かるが兵士一人鍛え上げる金に比べたら微々たるものだ。つまり…だ、長々と説明したが要するに”ギルドで依頼をこなして実力を付ければ、魔界へ出兵と言う形で行ける”と言う話な訳だ」

「…話してないことがあるだろうお主、そこまで話せるのじゃったらその兵士育成の仕組みの欠点も分っておるはずじゃ」

「…このギルドの仕組みの大きな欠点は新人が死にやすい事だ、当然だな、禄に訓練もしてないやつが実戦に出て勝てる訳がない。そして最初から鍛えてるような奴は大体が兵士になる。だが、まあ一部追い詰められて、才能が現れる奴もいるから悪い事じゃあない。」

「…その様な甘い目論見でここから出すわけにはいかん」

「…どうしてもか」

「しっかりと理由を話せい、誤魔化しや嘘でこの里を抜けようと思

わぬ事じゃ」

「……はあくこう言つと恥ずかしいから嫌だったんだけどさ……実は俺、ホームシックなんだ」

「ホームシック？」

「そう、いきなり兵士に……いや盾になれなんて言われてさ、生まれ故郷から無理やり戦場に連れてこられて、味方からは人間もろとも殺されかけるしさ、もううんざりなんだよ。もうさ、帰りたい、ここが嫌ってわけじゃない、故郷に帰れる可能性が無いなら諦める、だが俺は幸運な事にもわずかとはいえ帰れる可能性が残ってる。だったら……俺は帰らないといけない。故郷の親父達は俺をもう死んだと思ってるんだ、そんな親父達にもう一度俺の姿を見させてびっくりさせてやりたい、びっくりさせた後、お袋のあの温かい野菜のスープを飲んで、お袋が寝たらこっそり親父と杯を傾けあう、そうやってまたあの平穏で幸せだった日々に戻りたい……そう考えてしまっただ」

「……そんなこと言われたら、通さぬわけにも行かぬではないか……」

「本音だからしょうがないだろ」

「お主の覚悟は伝わった……だが、条件がある」

「ああ、実力を付けてからっていう事だろ」

「……え？何？シリアスな雰囲気というのに！もう少しもつたいがらせんか！此処でのお主のセリフは”条件……？”とかじゃろう！」

「おいおい、長老、いくら吸身して人間になれるからって俺は元スライムだぞ？直ぐに此処を出てギルドに入ろうなんて思っちゃんないさ」

「お主の言い方では今すぐ出るみたいな言い方じゃったではないか……」

「俺は鍛錬するって言ってたぞ」

「……そう言われれば確かに言っておったの……」

「だろ？だから、言霊の基本的な使い方を教えてくれよ。それさえ

教えてくれれば、あとは自力で何とかするから」

「…その前にお主、なんで僕がこんなに反対したのか理由が分かるか？」

理由：？そういえばなんでこんなに強固に反対するんだろう？

「さっぱりだ」

「僕も同じように魔界に戻ろうとしたからじゃよ」

「へ？」

「…僕もここが故郷では無くてな、実は故郷から逃げてきたのじゃよ知り合いがいたこの里へ」

「逃げて？」

「ああ、双子とも言うべき奴と離別してな、どうしても故郷に帰れなくなつてな。だが、しばらくしてやはり仲直り…とまではいかなくとも話をしたくてな？こっちでお前と同じようにギルドに入り、兵士になるところまではいったのじゃが…」

「じゃが？」

「スライムだとばれてしまつてな、そこからは来る日も今まで仲間だったギルドの奴らに追われてな、しかも、なまじっか顔が売れたものじゃから、変化が使えるのもばれていてな」

「変化がばれた時点で人間じゃねえつてばれてるだろ」

「変装術つていつて誤魔化したのじゃよ、一番最後の追つては…長年連れ添つてきた相棒じゃつたよ…闘いこそしなかったが…未だにあ奴の言葉は夢に出てくるわい」

「…なんて言われたんだ？」

「…さての、夢じゃからのう、言われたのは覚えておるのじゃが、内容まではのう」

「そうか、そりゃ残念だ」

「さて、退屈な老人の長話を聞いてくれた者にはお礼をせねばのう」  
「お礼？」

「うむ、言霊のいろはと人間社会について、お主にしっかりと教えてやるう」

「…お願いします」

「では、今日は魔術について…」

「魔術の知識ならばうちり思い出せるぞ！えーっと”魔術”とはほとんどの生物に備わっている臓器”魔臓”により、生み出される魔力と呼ばれる力を使って行使される術だろ。そして属性と呼ばれるものがあり、基本的には火・水・土・風・雷・光・闇・無の八種類で、それぞれに特徴がある。それらの属性の魔術以外にも”秘術”と呼ばれるものが存在し、そのほとんどが秘匿されている。

数少ない広まっている秘術は、水と光の混合魔術の”救世”の魔術を人間側の教会が公開している。ええつとまた、人間と魔族どちらにも、魔臓を生まれ持つて来ない子供が生まれる場合がある、そういう者達は”異能者”と呼ばれ、年の取り方が変則的になり、寿命が著しく伸びる。だろ！」

「お、おお」

「…俺達は魔臓を持っている殆どの種族から見事に漏れてるからな…いや、人間になって魔術が使えるようになるかと思うと、楽しみで、楽しみで、完全に暗記しちゃったよ」

「…そう、その事なのじゃよ。儂がお前に魔術の事を話そう思ったのは」

「…？？どういう事だ？」

「実はのう…儂ら魔臓があっても殆ど魔術が出来ぬのじゃ」

「……………そんなのって…ないだろ」

「だ、大丈夫じゃ！無属性の魔術なら使えるからなそう肩を落とすな、な？」

「無属性って…魔力の燃費が一番悪い属性じゃねーか…」

「使える可能性があるとしたら”魔法”かのう…」

「”魔法”って、完全な夢物語じゃん…」

”魔法”とは古代人が使ってたと言われる、魔法の元祖、超上位互換みたいなものだ。

今”魔法”が使える者はいないが、”法具”と呼ばれる道具を使つて魔法を行使することは出来る。と言つてもどんな法具でも取引は超高額の上、その法具の使い方や安全性とかを調べるのに小さいものでも半年、武器なら三年、大掛かりなものなら十年以上はざらだ。

ついでだ、”門”についても説明しておこう。 ”門”とは超大型転送法具の通称だ、魔界に六つ、人界に五つある。使い方は一定量の魔力を充填後座標を指定、そして座標が指定したところに”門”が現れそこまで一気に転移が出来る。

まあ、昔こそいきなり敵の本拠地に転送とかも出来たんだが…今は主な国には結界の法具があり、そのお陰でそんな事は出来なくなっているそうだ

「しかし、魔術は夢ですら無いではないか」

「…そう言われればそうだけだよ…」

「ええい！魔術が使えるかつたぐらいで情けない」

「だってよ」

「全く、シャッキツとせんか！あつ」

長老がそう叫びつつ、振るつた平手は、その軌跡上にある俺の体を無慈悲に打ち、壮絶な痛みが俺に走る。痛いと思つた瞬間、最近慣れ親しんできた黒い闇に俺の意識は包まれていった。



#### 第四話・言霊と老け顔

一週間後、俺の体は少しの運動なら出来る程度には回復していた。お陰で今長老による”超大賢者様殿による、壮絶に頭が悪いルフト君の為の、超：以下略が行う青空言霊講習会”が始まるうとしていた言ってて腹が立つ上に無駄に長いし、恐らくボケようとしているのだが全くもって面白くない。

「おい、長老：ボケるならもうちょっと笑えるのにしてくれよ…」  
「ボケる？何を言っておるのじゃ？お主」

本気だった、この事実には俺は驚愕を禁じ得ない。驚きすぎて禁じ得ないなんて普段言わないような言葉を使ってしまった。…俺、この爺に教わって本当に良いのか…？

「……………」  
「じよ、冗談じゃよ、冗談！」  
嘘つけ、あの時の顔は本気で「何言ってるの？」っていう顔だったぞ。

「まあいいや…それで？どの言霊から教えてくれるんだ、長老」  
「まずは”吸身”からじゃ。もう知っていると聞いたいじやろうが…お前はこの言霊が何をしているのか、本当の所を分って居らん」

「まあ吸身から入るのは良いんだが…その前に言霊ってなんなんだ？秘術って親父達からは聞かされたぞ」

「む…今はそう教えておるのか…まあ良い。秘術とは即ち秘奥の魔術の事じゃろ？だったら、儂らは使えんとされておるのにこの言葉を使うのはおかしいじゃろ？だからこつちでは便宜上、言霊と言っておるのじゃよ」

「だったらなんで秘術なんて教えるんだ？」

「…言霊と言つ言葉を知らないからじゃろう、まあこの言葉はあまり使われることもないからのう」

「うん？どんな意味なんだ？」

「…まあその事を話してもいいんじゃないが…時間が勿体無いから吸身の話に移りたいのじゃが」

「おっと、悪い」

「では、静かに聞いておれ、質問は最後にまとめてじゃ」

「了解だ」

「吸身”お前はこの前”吸身は相手の体と記憶を吸収する”と言っていたが、残念ながらそれも間違いじゃ、あの時のしてやったり顔、今思えば滑稽じゃわい」

「喧しい！いいじゃ、黙っておれ」ぐうっ…！

「なんで…なんで！俺はあの時あんなに格好つけてたんだろう…思い出せば思い出すほど顔から火が出そうだ」

「まあその事は後でじっくり話すとして…正解を言うとな”吸身は相手の全てを吸身する”じゃ、相手の全て…これはじゃな、相手の体とその”魂”を吸収するという事なのじゃ、魂…この言葉は酷く定義が曖昧じゃから、俺が定義した”魂”について話すとじゃな、記憶や意思など全てとその生物の”姿形の記憶”の事と定義しておる、まあ姿形の記憶じゃ語呂が悪いからそのまんま”形憶”とでも言つかの、この形憶は他の言霊で重要になるのじゃが…まあそれは後で話すとして、まあ纏めると”吸身は吸身者の可能性を広げる”とでも言わせてもらおうかの、さて、何か質問は？」

「可能性を広げるってどういう事だ？」

「その疑問を解決するには”変化”の話をするのが一番じゃな」

「だったら、頼…お願いします」

「うむ、”変化”この言霊が何をするかは想像がつくの、”姿形を変える”それだけのシンプルな言霊じゃ、そしてこの言霊は最も”形憶”が関わって来る言霊でもある、まあ”姿形を変える”などと言った時点で気付いたと思うがの、この言霊は”形憶”を吸収した物にしか変われん、要するに吸身した生物にしか変われんという事じゃ、じゃから、今お主はスライムと吸身した何人かの人間にしか変われんという事じゃな」

「…という事は俺はこの先人間でいる間は毎日鏡で自分の殺した顔を見ないといけないのか…」

「安心せい、そこは何とかなる」

「どうやって？」

「吸身で得た形憶を混ぜ、新たな形憶を作ればいいのじゃよ」

「そんなことが出来るのか!？」

「僕の今の身体もそうやって出来ておる。方法を説明するのはちと難しいの…実際にやってみた方が早かるう。ほれ、やってみい」

「やれったってよ…」

「大丈夫じゃ、”変化”すると強くイメージすれば、あとは感覚でどうにかなる!ほれ、さっさとやれい!」

「わ、分ったよ……よし…”変化”」

唱えると、いきなり目の前に自分と吸身した人間の姿が頭に映る。例えるなら、超精巧な肖像画をまとめて並べられた場所を思い出しているよな感じた。成程、これが形憶か。

さて…と、とりあえず混ぜますかね。全ての形憶を混ぜ、なるべく自分の理想に近い状態に持つていく。手先があまり器用でない俺でも不思議と想像通りに出来た。

…よし、こんなもので良いだろう。俺は静かにこれが自分だと念じる。自分の元の姿を思い出す…が今はそれを段々と変えていき、先ほど創った自分の姿に塗り替えていく。

自分の核が僅かに熱を放ち始める。するとさっきまでは個体だった俺の身体がみるみると慣れ親しんだスライムのそれとなつて行くのが分かる。が、その状態も長くは続かず、また固形へと戻つて行く。五分ほどすると核は元の温度に戻つていった。

「…終わったのか？」

「うん?確かに変化しているが…初めてにしては早いう。まあよいほれ目を開いて自分の姿を確認せい」

…いつの間にか閉じていたらしい瞼をそろそろと開く。すると、変化する前よりも若干目線が下がっていた。よし、身長は問題ないみ

「ただ。」

「長老、鏡は？」

「ほれ、ここじゃ、にしても時間が掛かった割には…お主その顔で本当に良かったのか？」

「ああ、問題ない、想像通りだ」

鏡を見ると、黒髪黒目、若干のたれ目に一重、顎には無精ひげが生え、髪はぼさぼさでまとまりが無い。歳は三十までは行って無くとも、二十代後半は確実に言ったようなさえない感じの顔がそこにはあった。

「お主も変な奴じゃのう、なんでそんな顔にしたんじゃ。ここは人間で言う所の美男子と言う奴にするのが一般的じゃのに」

「いや、この顔でも結構頑張ったんだぞ？」

「まあお主がそれで良いなら良いのじゃが…しかし、背格好も余り強そうではないし…というかお主十七歳と言っておったのにそんな老け顔でよいのか？」

確かに俺の背格好は身長は大体170センチと言った所で、筋肉もあまりついておらず、腕などは少し曲げたら折れそうだ。だが…

「いかにも強そうって格好していると、危険な仕事に来そうだから…それよりも、こんな格好でも着実に依頼をこなしていった方が良い様な気がしてな。老け顔に関しては…俺が吸身した奴らはみんな年を食っててな…しょうがなかったんだよ」

「…十七でその顔…頑張るのじゃぞお主」

「…ああ」

およそ、十歳以上見た目が違うからな…性格も落ち着いた性格にしないとな…

「では、次は”圧縮”じゃな」

「お願いします」

「”圧縮”この言霊は…実際体験した方が早いもの。そうじゃな、変化のテストの為に…よし、お主、立て！」

「あ、ああ」

「よし、では50メートル程離れるのじゃ……よしそこじゃ、ではそこを動くでないぞ……」圧縮」

”圧縮” そういうと長老は右拳に手を当て、瞼を閉……え？

「へっなにす」破城撃”「ごべえええ！？」

瞼を閉じたと思った瞬間、長老はこちらに一瞬で近付き、俺の鳩尾に必殺の一撃を放っていた。そう、まさに必殺だ。なんてったって長老の拳は俺の身体を見事に貫通し……ってオイ！

「痛つつつ……たくない？」

見間違いかとも思いもう一度腹をしてみるが、やはり俺の腹には長老の腕が突き刺さっている……見ててあまり気持ちがいいものではない。

「はあ、やはりお主そこまで考えておらなんだか」

「へっ？」

「痛くないのも問題じゃがほれ、もう一つ直ぐにわかるおかしなことがあるじゃろ」

「……あれ？血が出てない？」

「……そうじゃ。お主、もしかして人間の身体について思い出そうとしていないのか？」

「あつ！そういえばしてないな」

「……すううう……こんつつの馬鹿者がああ……！」

「ぬお……！」

至近距離で浴びせられる、超大声の長老ボイスに俺はたじろがざるを得なかった。……っていつか

「うるせえ！こっちは腹打ち抜かれるくらい近いんだ！そんな大声出さなくても聞こえるわ！」

「お主、そんな事でよく」ぼきゅ、ホームシックで家に帰りたいので、人界に下りまーす”なんて言えたもんじゃな！」

「だれがそんな気持ち悪い言い方したんだよ！」

「お主じゃ……！」

「一言たりともそんなこと言ってないわ！俺的名シーンを台無しに

するな！」

「俺の名シーンって、ぶつぶつお主言つてて恥ずかしくないか？」

くっ、この爺……！言わせておけば……！

「うるせえ爺！言わなかつたけどよ、今回のなんちゃら講習会の名前、センス悪すぎんだよ！」

「なっ……！……ふふん、まあ許してやろうかの、お主のセンスが古すぎて俺の最先端のセンスが分からんとは……怒りを超えて同情に値するわい」

「最先端？ものは言い様だなあオイ！」

「やれやれ、自分のセンスが古いと言う事実がそんなにショックだからと言つて、そうやってがなり立てるはどうかと思つぞ、俺は「逃げる？上等だ……！……了解了解、最先端であることは認めよう、だが最先端すぎてもう落つこちてるんだよ！滑るを超えて落ちる……！……あんだどんだけセンスないんだよ」

「言わせておけば、お主……！良いのか？もう言霊の事を教えんぞ？」  
こうやって何度も俺は苦渋を嘗めさせられてきた、だがそう何度も何度も……！

「ああ、いいぞ！もう、爺なんぞに貰わなくて充分だ！」

「えっ？い、良いのか？本気じゃぞ？俺、本気で教えんからな！？」  
「毎度毎度そうやって脅してきやがって、もううんざりだ手前には……！」

「えっ？えっ？………すまんかった、俺が大人げなかつたです……」

「いえいえ、謝らなくていいんですよ？超大賢者様殿に言わせれば僕のセンスは古いんでしょう？そうだ……そんな古、いセンスの僕なんかに超大賢者様殿の教えを授けていただくなんてそもそも間違いだつたんだ！ああ、申し訳なかつた！こんなセンスが古……い僕のを、為に貴重な時間を割いていただいて！超大賢者様殿その高尚な教えをどうか他の者にお教えください……では僕はこれで……」

「すまん！俺が悪かつた……！！」

「良いんですよ別に……僕が悪いんでしょう？」

「いや、俺が全面的に悪かった！だから許してくれい！」

「ちっ！しょうがねえな、許してやるよ」

「はい…って長い子小芝居じゃのー俺たち」

「そうだなー腕が刺さるような距離でやってるようには思えないよなー」

最初こそ本気で怒鳴り合っていたが途中で長老が目配せして来たので途中からは完全に演技だ。

ずぶずぶと腕を抜き、長老と向き合う。うん、腹がスーッと気持ち悪い。

「でっなんでこんな身体になってんだ？」

「理由は簡単じゃ、変化の時にイメージできていなかったからじゃ」

「おいおい！そこまで細かくイメージしないとだめなのか！？」

「当たり前じゃ！…と言っても一つ一つの形まではイメージする必要はない、曖昧でもそういう器官のイメージができておけばいいのじゃ。血なら血管を、痛みなら痛覚神経と言っふうにな。わかったら腹を治すついでにそこまでイメージして変化せい」

「その程度で良いなら何とかかなりそうだけだよ。それじゃあ…」変化”」

一瞬で腹の穴が塞がって、血管が出来、痛覚神経が出来たような…気がする。

「ほれ、耳を引っ張るぞ」

「ちよっ、待っ！痛ててて！…」

「よし、痛覚は合格じゃな、では血はどうかのう」

そう言うと、長老は何処から取り出した小ぶりのナイフで俺の腕を浅く切る。

「って！」

「うむこちらも合格じゃな」

見てみると、傷口にはつつすらと血が溢れてきていた。

「さて、お主、何をされたか気付いたことはあるかの？」

「そうだな…やられた時の感覚で言っつと、殴られてと言っつよりは、

弓や弩のようなもので撃ち抜かれた感じだったな」

「まあイメージは大体あっておるの。ほれ、これを見てみい……」 圧縮”」

「うん？…あれ、若干だが腕短くなって無いか？」

「うむ、その通りじゃ。今、儂の腕の中は人間の身体ではなく、スライムになっておる。そして、そのスライムになっている部分を圧縮…まあお前の言うように弓を精いっぱい引いた状態にしている状態じゃ。そしてあとは弦を持つ手を放すがごとく、圧縮を解けば…」  
「言つと長老は付近の岩に近付いていく。すると、岩を粉碎するような音しながら岩が砕けた。うん岩が砕けてるんだから当たり前だな。比喩的表現な高度な技法、俺にはまだ早かったみたいだ。」

「岩をも砕き、撃ちぬく鉄拳となる」

「成程ねえ…そんな事をされたら俺の腹なんて余裕で風穴空くわな…」  
「こつということが出来るって…事だ…長老、あんた自分の脚を圧縮して、地面に向けて発射。それで俺に一瞬に近付いただろう」  
「その通り。便利じゃろう？」

「まあな、さつき見た時腕が短くなっていたがそれも少しと言えるぐらいだしな」

「それぞれ”破城撃”、”重蹄脚”と呼ぶのじゃぞ」

「…また破城なんて付けて…あんたも好きだな、そういうの」

「いやいや、技に箔をつけるためにじゃな…」

「いや、俺も好きだから気にすんなよ」

「じゃから儂は別に…」

「はいはい、分った分った」

「ぬう…まあよい。では今日はこれらを一通り練習じゃ」

昼から始まった青空講習会は、日が沈み星空になるまで続いた。

## 次の日



次の日の朝、俺は何時もより遅く起き、寝覚めも最悪だった。

昨日は散々しごかれたからな…だが、今日も訓練はある、このまま二度寝すると言う甘い誘惑を振り払いつつ起きようとした。

起きようとしたなんて言ってる時点で気づいたとは思いが、俺は起き上がることが出来なかった。いや、激痛とかは走らなかったが、なぜか体が全く動かなかったのだ。

「またかよ…もういい加減このパターンにはマンネリだよ…」

「何を独り言を言っておる」

「のわ！？長老！」

「耳元で大声を出すでない！全く…にしてもお主、今起き上がるうとしても体が動かんじやろう？」

「へ？ああ、よく分ったな長老」

「そりゃあそうじゃ、俺も初めて言霊を何回も使った時はそうなった」

「その言い方からするとこれって言霊を使った結果なのか？」

「うむ、お主、気付いておらぬと思うが今のお主の顔色殆ど死人じやからな」

「え？ちょ、ちょっと鏡をとて…うわ…こりゃ酷い…長老、言霊を使ったらなんでこうなるんだ？」

「いや、俺もよく分らんのだが、魔術には魔力がいる様に、言霊には生命力がいるようなのじゃ」

「生命力？」

「うむ、なんかこう…命を消費する感じじゃな」

「いやいや、そんな軽く言わないでくれよ！俺大丈夫なのかよ！」

「慌てなくとも大丈夫じゃ、生命力は魔力と一緒に回復もするから、じゃが使いすぎると死ぬかもしれんがの」

「…なんで、昨日のうちに言っておかなかったんだよ…」

「……………忘れておった」

この後、俺と長老の間で大ゲンカが始まったことは言うまでもない

#### 第四話・言霊と老け顔（後書き）

どうも、生意気ナポレオンです。

今回出てきたセイン、メツセは長さの単位で、セインはcm、メツセはmの事です。…それぐらいしか書く事が無いですね（^| ^ ;）  
では、今回も読んでいただき本当にありがとうございます

## 第五話：旅立ち（前書き）

まず、最初に：申し訳ない！前話の最後に少し文を追加しております、消えていたのに気付かず投稿してしまっていて：言い訳ですね、ほんと申し訳ない。

## 第五話：旅立ち

あれから三年、俺は長老にしごかれ続け、今日やっと帰郷への旅路が始まる…

「なんて思ってみたりしてな」

「いきなりなんじゃい」

「いや、別に大したことは無い。にしても三年かー、半年ぐらいで済む予定だったんだけどな」

「半年でなんもかんも学べわけなかるう…はあ念のため言っておくが」

「分ってる分ってる、感情的にならない、無暗に言霊を使わない、だろ？」

「本当に分って居ればいいんじゃないが…」

「大丈夫だって、っていうかそろそろ行かないと…俺泣きそうなんだけど」

「ふん、男の涙なんて見たくないわい…もう何も言わん、これは饞別じゃ持って行け」

と長老は薄汚れたカバンをこちらに放る、中には短剣に投げナイフ、それと少量の金貨が入っていた。

「ん…有り難う長老、んじゃ行ってくる」

「ああ、もう顔を合わせないよう願っておるよ」

「ああ、こつちもだ」

「ではのう」

「じゃあな」

そんな短いやり取りをして、俺は三年間過ごした里を後にした。

里を出て一か月、馬車を乗り継ぎ、道中様々な人と会いつつ、自  
的の国：「いや」街」である商人とギルドの街「ゲシャフト」に俺はい  
た。

”街”　人界の連合軍は主に人界でも主要な五つの国とこの一つ  
の街で構成されている。そう、この街の所為で六大大国などと言え  
ないのだ。不便で仕方がない。

だが、これには理由がある。一つ目は政治形態が王政でなく議會  
民主制だという事。二つ目は：少し長い話になるんだが、実はここ、  
最初は小さな村だったのだが地理的に五大大国の中心近くにある為、  
それぞれの国の商人が丁度交わる様になっていた。

しかも、その商人の護衛として来ていたギルド加盟人がここでお  
互いに情報交換しあい、ギルド加盟人が集まる為依頼も集まる、そ  
んな感じでどんどん物流や人の交流が盛んになり、どんどん村は大  
きくなっていった。

そして、その影響力は五大大国でも無視できないレベルになっ  
ていた。だが、ここで一つの弊害が出てきてしまう。村には”門”が  
無かったのだ。

当時も今も正式には決まっていけないものの、”門”を持っていな  
い場合は大国とは認められないと暗黙の了解がされているのだ。そ  
のため国と名乗ることが出来なかった。

村や町では小さすぎ、国と名乗る事は許されない。そうして苦肉  
の策で生まれたのが”街”と言う訳だ。

なんにせよ取り敢えずは金が欲しい、此処に来るまでに金貨は尽き  
てしまった。

という事とで、俺は人ごみにうんざりしつつもギルドに向かってい  
た。

標識に載っている数字がだんだんと減って行き、ギルドまであと300メッセと言った所だろうか、大通りからは見えづらい細道から何やら揉めているような声がする。しかも、片方は女性の声だ。…一番堅実なのは聞かなかつたふりする事だよな、けどそれはちよつとな、かといって走って駆け付けるのもな…とりあえず様子見に行くか。

抜き足差し足でこつそりのぞいてみると

「おい姉ちゃんの所為で、あのおっさん逃げたじゃねえか！どうしてくれるんだよ！おい！」

なんてありきたりな事を言ってる奴がいた。しかも、これまた絡んでいるのが美人と言う辺りがまたありきたりだ…にしても本当に美人だなあの人、可愛いと言うよりは綺麗と言った感じだな、長い赤髪が良く似合っている。正直に言おう好みである。つとなんて慣れない描写をしている暇では無かつた。しつかりと話を聞こう。

「お前がああ男性をカツアゲしようとしていたから止めたただけだ。こちらには何の非もない」

「はあ、姉ちゃん、そんなんじやそんなんじや世の中渡っていけないぜえ？ほら、見てみるよ大通りの連中はこつちに目もくれやしねえ」

「確かに私が不器用なのは認めよう。だが私に非が無いのは事実だ」  
「おいおい、だからさあ非がある、ないの話じゃ無い訳分かる？カモを逃してくれた責任を払えっつていつてんの！そうだなあ…あなた美人だから今夜ちよつと家に来れば許してやるよ」

「…下種が」

「おおつと、武器に手をかけるなよ…俺は番兵にも知り合いがいるからよ…あなたの経歴に泥がつくぜ？」

「…経歴に泥がつくぜ？」とかもう少しい言い回しなかったのかな？陳腐すぎてやる気がそがれる。

…のしてやってもいいがああいうタイプって滅茶苦茶根に持つんだよなあ…かといってここで見なかったことにするなんて割り切れる

程非情にもなれないしな……

大体にして俺って優柔不断なんだよな……よし、あれぐらいのチンピラならあの手が使えらるだろう。一丁やってみますか。

「お〜い、その旦那、そこら辺でやめたらどうです？」

「はあ、またバカが一人きやがった。おい、その冴えねえ顔を砕かれたくなかつたらさっさとどっかに行きな」

「いやいや、美人さんがこんな目にあつてたらねえ？男としては見逃すわけにはいかないんですよね〜」

「俺は優し〜いからあと一回だけ言つてやる、失せろ」

「そういう訳には……」

「はあ、分からねえ奴だ……なあ！！」

言いながらチンピラは俺の近くにゆっくりと歩いてき、いきなり鳩尾に拳を放つてきた。勿論避けることも出来たが元から受けるつもりだった俺はむしる位に行く感じで拳を喰らった、しかも鳩尾ならやりやすいしな。

「ぐっ！うっ！げばあ！」

「うわ！下呂吐きやがったって……な、なんだこりゃあ！血じゃねえか！」

俺の口から血が溢れ、殴られたはずの鳩尾にはなぜかナイフが刺さつておりだくと血が流れていた。もちろん俺の仕業だ。

「貴様、何をした！」

「お、俺は何もしてない！」

「何もしてない？嘘をつけ！だったらその男に刺さっている物はなんだ！」

「えっ……？ち、違う俺はナイフなんて持つてなかった！」

「見苦しいぞ！この状況なら殺されても文句は言えないという事は分つてるんだらうな！」

「ち、違う！違う違う！お、俺じゃない！俺はやってないんだ

あ……！」

そういつてチンピラは取り乱した様子で逃げて行つた。まあこの状

況で腰の剣に手をかけられたらそうなるわな。

「おい、待て！」

「いやいや、お姉さんがちょっと待ってください」

「な！なんで生きて…！はっ！そんな事よりう、動くな、直ぐに救世使を呼んで来る！」

「いやいやお姉さん、僕大丈夫ですつてば」

「そんな重傷で大丈夫なわけが！」

「いや、そもそも傷なんて付いてないですよ。ほら」

そう言つて俺はナイフを腹から抜き、直ぐに傷を塞ぐ。刺さつたのは小ぶりの投げナイフだったから、塞ぐのも一瞬だ問題は無いだろう。

「ほらね？」

「し、しかし血が出てるでは…！」

「ああ、これ血糊ですよ血糊、まあ本物っぽくみせる為に少し錆びた鉄を入れてますがね」

「と、という事は…」

「そ、さっきのは僕の芝居つて事です。じゃあお姉さんさようなら」

「ま、待て！ナイフはナイフは何処から出てきた？その口ぶりからするとナイフも貴方が仕組んだんだらう！？」

…それを聞かれると辛いんだよな…実は刺さつてたナイフ俺が体の中に仕込んでたナイフだ、肋骨の部分をスライムにしておいて、そのスpeesに投げナイフをありつたけ仕込んでいる。そこから、何とか刺さつてる風に見せかけたのだが…それを言う訳にはもちろんいかない。無視したらそれはそれで怪しいしな…

「…いや、それはさっきのチンピラが刺してきたナイフですよ。それが僕が腹に仕込んでた血糊入り瓶に偶然あたつてこうなっただけさ。僕はそこまで器用じゃないんでね」

「嘘だ！」

いやまあそう言いますよね。あのチンピラナイフ持っていないとか言



つてたし、しかしここまで言い訳できただけでもよく頑張った方だ  
と思う。

「本当なんだけどなあ」

「話してくれないみたいだな…だったらせめて名前を、名前を教  
えてくれ」

「全部話したんだけどなあ…まあいいや、名前はですね、ルフト、  
ルフト「ゼー」です。…ここらじゃ聞かない名前でしょう？」

「ルフト…か、確かに聞かない名前だな…ルフト助けてくれてあり  
がとう」

「いえいえ」

「…ところでなんでお前はそんな丁寧な言葉なんだ？歳は私の方が  
下だから私こそそのような言葉を使わないといけないのに」

「女性に失礼だとは思うんですけど…おいくつですか？」

「？今年で二十三だが」

「だったら問題ないですよ、僕は二十ですから」

「えっ！？す、すまん」

「いや、自分が老け顔なのは分ってるから気にはしないんですがね  
…まあでは今度こそ、さようなら」

「ええ、本当にありがとうございました」

そうして俺はまた、標識のある大通りまで戻って行った…にして  
も言葉づかいを変えるのは思ったよりも大変だ。

#### 一時間後

やっと着いたああああ！あの後、どこで間違えたのかわからないが、  
標識の通りに出れず、散々探し回ってやっと着いた。

だがこの建物がギルドだと知っていれば、直ぐに来ることが出来た  
だろう。それ位に大きな建物だった。

若干の希望と大量の不安を抱えつつ、ゆっくりとドアノブを回し中に入る。

そこで俺を待っていたのは長老から聞いていた騒がしい酒場のような場所ではなく、清潔感が溢れる高級な宿屋の受けつけのような場所だった。

慌てて外に出て看板を見てみるが、「そこには間違いなく”ギルド渡り鳥の巣”と書かれた看板が掛かっている。

まだ、動揺は収まらないが取り敢えず受付の女性に尋ねてみる。

「ここがギルドであってますかね？」

「ええ、そうですよ。何かご依頼でしょうか？」

「いえ、ギルドに加盟したいのですが……」

「え！？加盟ですか？失礼ですが、貴方様が？」

驚くのも無理はない見た目は全く戦うタイプじゃないからな。

「ははっええ、そうですよ」

「……分かりました。ではあちらの方にいる受付カウンターの方で加盟ください」

「ありがとうございます」

言われたカウンターのの方に慣れない厚みがある高級感あふれる絨毯を踏みしめながら歩いていく。

「すいません」

「あっこちらは依頼受付じゃありませんよ」

ものすごい自然に言われた、恐らく間違えて此処に来る一般人も多いのだろう。だが残念、今回は間違えてきたわけではないのだ。

「ははっいやそうじゃなくて、こちらに加盟して来たんですが」

「ええ！？この仕事はい」

「いえ、大丈夫です。恐らく命に関わるとか言おうとしたと思うんですが、大丈夫、分ったうえでここに加盟しに来てるんですよ」

「……そうですか、そう言われるんなら良いんですけど……では、この契約書にサインと登録書の必須項目と書かれてる部分にご記入ください。それ以外は任意ですが、なるべく空き項目が少ない方が仕事

が来やすいですよ」

「分かりました」

死んだら自己責任、報酬の二割はこちらによこせ、規約を破ったら罰則などのよくある文章が書かれている契約書にサインし、受付から離れてペンが置かれている机を探して、登録書を一通り見る。必須項目として書かれていた部分は、精々氏名位で他は全部任意みたいだった。取り敢えず住所や出身はかけないが、年齢、得意武器などはかける。

…特技か…特技この項目は重要だ、ここに変装などと書けば依頼を優先して受けやすくなるだろう…がやはり、ここは書かないでおくべきか…しかしなるべく早く帰りたいし…

#### 一時間後

ええい、もういい、書かん！多少遅くなっても、安全第一だ！特技の部分が空白のままの登録書を持ち、これ以上迷わないよう、走る様に受付へ持っていく。

「大分時間が掛かってましたね…では、確認いたしますので少々お待ちを…特技の部分が空白ですが宜しいでしょうか？」

「…え、ええ大丈夫です」

「…ここを書いているのと書いてないのでは依頼の受けやすさが違いますか…？」

その言葉を聞き、考え直させてくださいと言おうとしたとき、後ろからするりと手が現れ、特技の欄にこう書き加えた”小細工”と、

「へっ？」

「いや、しかし、お前もギルドに加盟するつもりだったとはな、丁度良かった」

聞き覚えがある声に慌てて後ろを振り返ると、そこには見覚えのあ

る赤髪の女がいた。

「なっ！なんでここに」

「私も此処に加盟に来たんだよ、あっこれが私の登録書だ。よろしく頼む。あとこの男の登録書もこれで良いぞ」

「いやいや、何言ってるんですか！ちよ、本当に持って行っちゃったじゃないですか！なんですか！特技が小細工って！」

「いや、しかし私を助けてくれた時のあれは小細工だっただろう？」

「そう言われたらそうですね、別に特技って事じゃ…！」

「まあもう行っても仕方ない話だろう、気にしたらダメだぞ」

「あんたの所為で…！…はあ、分かりましたよ、で、何か用ですか？」

「いや、知ってる顔があったからな」

「それだけですか…？ってあれ、ここ出身じゃないんですか？」

「ああ、ラディーア出身だ」

「へ、あの魔術と学問の国の、なんでここに？」

「…ほいほい人の素姓を詮索するのはどうかと思うぞ。私は」

「うっ…確かにそうですね。お互い知られたくない事はありますよね」

「うん？お互いという事はお前も何かあるのか？」

「あっ墓穴ほった、って言ってもこれくらいなら直ぐにカバーできるだろ。」

「いえいえ、今のは言葉のあやですよ、あや。僕は清廉潔白、隠し事なんてありませんよ」

「と言ってるんだがどうなんだ」

「身元と経歴不明、確実なのは氏名だけですな。年齢も二十って書いてますが正直あの顔で二十は犯噓ですよ…」

余計なお世話だ、此処まで言われると普段は気にしない俺でもさすがに傷つく、っていうかこの受付って一応仕事だよな？接客業だよな？

「清廉潔白って言ったのはどいつだったかな？ルフト」

「僕以外の誰かですって、そーいのかって言ったらだめなんじゃないですか!？」

「あつそう言われればそうですね。ごめんなさい」

「軽い! もう少し誠意を見せて謝ってください!」

「まあまあお前も嘘を着いてたわけだし」

「そう言われれば…って論点ずらさないでください! っていうかあんたも詮索してんじゃないかねえか!」

あつやばい、地が出た。

「まあそう言われたらそうだな。悪かった」

「えっええ。いや、そこまで謝って貰わなくていいです。僕も嘘を言ってたわけですよ」

…なんだろう、気付かないでいてくれたのは良いんだが、なんかこう、話的にはここで違和感を感じたりするんじゃないのかな? まあいいんだけど。

「そうそう、喧嘩両成敗ですよ」

「僕はあなたに一番謝ってほしい」

「まあまあ良いじゃないか」

「はあ…もうどうでもいいや。っていうか僕はあの時あなたを助けたのを後悔し始めましたよ」

「どうして?」

「絶対、僕いらなかったでしょ。あなたがあいつをのして終了、でも良かったのに僕が出しゃばって…そう考えると結構間抜けじゃないですか、僕」

だって死んだふりしたただけだし。

「いや、そんな事は無いぞ。あの時確かにのすことは出来たが、後々面倒になってただろうからな。本当にあの時の事は感謝してるんだ」

「…急に真面目にならないでくださいよ」

「っていうかここで立ち話続けるの止めてくれませんかねえ?」

「あつすいません」

「おつとすまん、では早めにもう一つの用事を、実はこいつと相棒登録したいんだが…ここで良いのか？」

「ああ、はいここで大丈夫ですよ」

「いやいやいや！ちよつと待って！僕は何も承認してないですよ！つていうか相棒登録つて何！？」

「そんな事も知らないのか？十年くらい前にだな、新人の死亡件数の多さが問題になってな、加盟して一年は絶対に二人組以上じゃないと依頼が受けなくなつたんだぞ」

「えっ！？ほ、ほんとですか！？」

「ええ、本当ですよ。つていうかギルドに入るんだつたらそれ位は知つておいて欲しいんですが…」

「はあくギルドの雰囲気も長老が言つてたのとも随分違うし…時代が流れるのつて早いな」

「ギルドの雰囲気ですか？…ぷぷ、もしかしてなんですけど…酒場みたいなのをイメージしてましたか？」

「え、ええ」

「ふ、ふふふ…」「ぷ、ぷぷぷ…」

な、なんだこの二人の女の含み笑いは…

「ふは、あははははははははは！」「あつひゃひゃひゃひゃひゃ！」

ロビーに響き渡る、笑い声の二重奏。あたりの人が何事かとこちらを見てきている…早くこの場から去りたい。

「な、なんなんですか！取り敢えず目立ちますから笑つのを止めてください！」

「す、すまん。あまりに昔の話をするものだから…ふふ」

「だって、そんなのもう昔の物語でしか描かれない想像ですよ？それをこの歳まで…ぷぷぷ」

「昔つて言つたて精々五十年ぐらい前のでしょ？そんなに笑わなくても…」

「へ？いやいや、ざつと百年以上前のイメージだぞそれ。と言うかやはり本気で…ふふ」

「もういいですよ！でっ相棒登録ってなんなんですか」

「ぶぶぶ…い、いや、要するにこの人といつも組みますよって言う  
宣言みたいなものです。これをしてるといつも組んでると云う事は、  
当然お互いに息があつてゐるって事なんで依頼を優先的に受けれたり  
するんですよ。だからまあ普通はある程度いろんな人とやってみて  
決めるんですが…」

「って言ってますよ。僕じゃなくて他の人と組んでみたらどうです  
？僕にはあなたの言ううとおり小細工ぐらいしか出来」

「得意な武器に拳に短剣、それと投げナイフと短剣はともかく他は  
奇特なものがそろつてゐるんですがそれについては？」

「ほう、そうなのか？やはり、私の目に狂いは無かつたな」

「いや、だからそういうのって言っちゃダメでしょ！」

「ああ、ごめん」

「もはやあんた絶対俺の事舐めてるよね！」

「まあまあ」

「大体あんたも大概おかしいぞ！普通そんな適当に決めるか！？」

「おい」

「な、なんだよ」

「侮辱しないでもらおうか、私は適当に決めたのではない。お前の  
その小細工は建前だ、お前はなにかおつきな隠し事をしてゐる気がす  
るんだよなあ」

「いや、詮索はしないって…」

「安心しろ詮索はしない。ただ、口調を無理して変えていたり、武  
器が変なのだったり、まあそんな事より一番怪しいのはだ…経歴や  
身元が不明な事じゃない、特技を書くかどうか迷つたという事だ、  
迷うという事は無い訳ではない。が、大っぴらにしてもいいのか迷  
つてゐると言つた所だろう。こんなに怪しい奴の秘密を知つてみた  
いと思つのは人間として当然だろう？」

口調の事気付かれてたのかよ！ってというか滅茶苦茶鋭いなあオイっ  
ていうか…

「長々と恰好つけて言ってるけど、結局はそれって詮索して」

「成程、それは確かにそうですね。そんな怪しい人物はギルド側としても、監視しておきたい所です。お願いできますかね。ええっと……」

「イレーナだ、イレーナ。ロートナイだ。よろしくな、ルフト。それとてええっと……」

「カツツエ。クラツシイですよ。イレーナさん」

「カツツエ、よろしくな」

「いや、何一つ納得してないんですが……」

「なんだ、清廉潔白だったら何の文句もないと思うんだが……はっ！もしか殺人犯？おい！カツツエ！確か殺人犯はギルドに入れないどころか死刑になる可能性もあるんだよな！」

「はい！勿論です！まあ相棒登録するような人ならそんなことは無いと思うんですけど……」

「いや、文法が成り立ってな……もういいや……分かりました、分かりましたよ。登録しますよ……」

「では、この水晶にお二人の手をお乗せください」

「了解だ」

「準備早いなあオイ」

俺とイレーナ二つの手を水晶に乗せると、水晶が虫眼鏡で雲が薄く掛かっている太陽を見た時ぐらいに輝いた、うん自分でも何言ってるか分からない。許してくれ……俺、もう疲れたよ……

輝きが終わった後、自分の腕に一つの輪っかが描かれているのが分かる、なんだこれ？

「なんなんだこれは」

「ああ、これはお二人が相棒登録している証ですよ。まあいろんな機能があるんですが、一番分かり易いのはこれをしてるとお互いが何処にいるか大体分かります。って言っても勿論任意で表示を消すことも出来ますし、良く表示されなくなったりするんですけどね」

「ふむ、不安定な物なのだな……ん？どうしたルフト元気が無いな、



「どうした」

「いや、なんでもないです…」

そんな感じで俺の帰郷の旅路は前途多難な始まりだった。

## 第五話：旅立ち（後書き）

どうも、生意気（以下

やっと人間が出てきました（苦笑）あと女性も・

正直な話、女性を書くのは滅茶苦茶苦手です。まあ女性以外もというか文を書くの事態にが、ってこんな事言いだしたらこれ以上書けなくなる！

うう、精進します（泣）

では、今回も此処まで読んでいただき本当にありがとうございます  
> (一一) <

## 第六話：初仕事

「此方があなた方のライゼカードになります。ちゃんと職業欄にギルド員と書いてあるか、お確かめください」

言われて自分のライゼカードを見てみると確かに、職業欄に書いてある、なんだか職についてるといふ事だけで誇らしい気持ちで一杯になる。

「大丈夫です」「此方も大丈夫だ」

「あ、そうそう、さつき簡単には説明しましたが、パティコネクト相棒登録についての詳細はこの冊子に書いておりますので、読んでおいてくださいね、では」

そう言つてカツツエは登録書を持ってどこかに行つてしまった。

「…とりあえずここに居ても邪魔だから、あつちの机に行くぞ」

「あ、はい分かりました」

厚い絨毯を踏みしめながら、依頼相談所と書かれている看板が上に掛かっている机に座る。座つていいのだろうか？

「まあ改めて自己紹介しておこう。名前はイレーナ・ロートナイ、得意な武器は至つて普通な長剣だ。一応魔創士の資格を持つてる」

「魔創士!？」

魔創士・魔術師の資格の一つだ。この資格は魔力を使って武器などを創る、創造魔術が習得している者に与えられるものだ。ここら辺の区別がめんどくさいんだが、ある程度の魔術師なら誰でも剣の形をした魔術を作るのは可能だ。

だが、その作った剣はあくまで唯の魔術であり固体では無い為、剣を弾いたり出来ない。まあ土の魔術なら元々固形だから関係ないのだが当然重量がある、なら最初から剣を持つておけばいい話だ。まあこんな話をするからもう分かつているだろうが、この魔創士が習得している創造魔術とは、重量なしで固体としての特性を持つている物を創る魔術だ。分かりにくいだろうから簡単に言つと、

魔術で普通の道具作っちゃうぜと言う話だ。

もちろんデメリットはある、魔力の消費量が馬鹿にならないのだから魔創士は普段は普通に剣で戦い、隠し玉としてこの魔術を使う訳だ。まあ余談なんだがこの魔術、見た目が派手で格好いいため習得難度は高いのだが人気が高い、挫折した魔術ランキング一位になったこともあるらしい

しかし、なんでそんな資格を持つてる奴がこんな所にいるんだ？

「…ではこちらでも自己紹介をしますか。名前はルフト・ゼーレ、得意武器はさつき漏れてましたが短剣に拳、投げナイフと確かに変なのを使ってますが…これは単純に筋力が無くて長剣を使えなかったと言うだけの話ですよ、得意と書いてはありますが、実際には何とか使える武器と言った所ですかね、あと資格は一切持っていません。先に言っておきますがこれ以上の詮索したら、今すぐダツシュでこの場を離れるからそのつもりで」

「…そんな事はしないさ」

嘘つけ、今にも「投げナイフには筋力が必要だと思っただが」といふか実用性がなくないか？」とか言いそうだったぞ。まあ俺がそっち側だったら俺も同じこと思うけどさ。

「それはありがたい。で、早速なんですけど、僕、今無一文なもので…なるべく早く仕事をしたいんですが、何かいい仕事ありませんでした？」

「なんだ、お前も無一文なのかだったら丁度いい、この依頼にしよ

う」  
「ちょっと見せてください……ゴブリン軍の残党狩りですか…」  
「ああ、ゴブリンぐらいなら新米の私達でも受けることが出来るだろっ？」

「だけど、来ていきなり実戦は…しかも、僕あまり強くないですし、大丈夫だ、もしお前に何かあったら私がサポートするさ、そのための相棒登録だろう？。それにこの依頼は歩合制だ、倒した分だけ報酬が増える、無一文の私達にはうってつけだ」

…確かにお金は欲しい、なんたつて今日の食費すらないのだ、なるべく早いうちに稼いでおくに越したことは無い、だが…大丈夫だとは思うがいきなり実戦は…

「うーん…」

「すまない、この依頼を受けたいんだが、ええ、あそこの奴と…え？ そうなのか？ だったら…ああ、今すぐ行く」

「え？ ちよっ！」

「よし、私が依頼受付は済ませたから早く行くぞ！ 今直ぐ行くなら無料で近くまで送ってもらえるそうだ！ ほら、早く！」

「ええ！？」

## 二時間後

カラスがけたたましく鳴き声をあげ、木々は来るものを拒むかのよう

に茂っている。そんな森の前に俺は居た。

どうしてこうなった…って思うまでもなく…あの女の所為だよな…！ なんて俺あの時助けようなんて調子乗ったんだろう…お陰で俺の”安全な依頼からコツコツと、帰郷は遠いが頑張るぞ作戦”が…！

「ん？ どうした？ こつちをそんなに睨んで」

「いや…なんでもありません。ところでそのゴブリンが潜んでる洞窟とやらは何処に？」

「この森をまっすぐ進んで三十分ほどの所にあるそうさ」

「はあ、了解です」

「全く…この程度の事のため息をつくな、ほら、行くぞ」  
「待ってくださいよ…」

そんなこんなで進路を邪魔する木々を切りつつ三十分ほど歩き続けると、やがて岩壁が見えてきた。岩壁？

「洞窟なんて、無いじゃないですか」

「おいおい、馬鹿正直に洞窟に潜むわけがないだろう、恐らく擬態か何かの魔術を入口に施してる」

「そう言われればそうですね…だったらどうするんですか？」

「地道に壁を探るしかあるまい」

「解術の魔術とか習ってないんですか？」

「魔創士に慣れる位だし、これ位は覚えてるは？」

「あ、ああ、解術は苦手だな、魔創士には必須の物でもないし習得してないんだ、悪いな」

「そうなんですか…じゃあやりますか…あつと！」

目の前に壁に触れた途端、壁の中にするりと入ってしまった。

「本当に真つ直ぐ行けばよかったのね…」

「大丈夫か！？ってなんだ、本当に真つ直ぐだったんだな」

「ええ、みたいですね」

「よし、奥に進むぞ」

「了解………」変化”

洞窟が予想よりも暗かったため、こつそりと両目を猫の目に変える、

「暗いな…おい、ルフト、魔力灯トーチ持ってるか？」

「持ってないですよ、っていうかそんな物つけたらばれるでしょ？」

暗視の魔術は…習って無いみたいですね」

「うるさい、魔創士になるので精いっぱいだったんだ」

「はあくだったら、その相棒印バディサインに触れてください」

「相棒印？」

「相棒登録したときに出た印の事ですよ、カツツエに貰った冊子読んでないんですか？」

ちなみに俺は馬車の中で暇だったので何回も読み直した、そういえばイレーナはずっと馬車の御者と話してたな。

「ああ、そんな物ももらったな…なるほど相棒印と言っのか…これに触れて…ってうわ！？」

「声を抑えてください、洞窟だから響くんですよ」

「すまん…だが、なんなんだこれは？急に夜目が利くようになった

ぞ

「相棒印の機能の一つ、感覚の共有です。僕は今暗視の魔術使ってるんで、夜目が利くようになったんですよ」

「そんなのがあるんなら、早く言ってくればよかったのに」

「…これ、魔術使ってる方が二倍魔力を消費するんですよ」

と言っても俺の場合は実際には魔術ではないので、関係は無い。

「そうなのか…すまないな。この分は戦闘で返す」

「ええ、頼りにしてますよ…っと。止まってください。ゴブリンが来てます。…巡回みたいですね、二人ほど魔力灯を持って近づいてきます。丁度近くに手ごころな隠れる場所もありますし、お互い一人づつ倒しましょう」

(了解、だったら私が左をやる)

(では、僕は右を…)

音をたてずに、かつ素早く近くにあつた岩陰に隠れ、左腰に差してある短剣を抜きゴブリンの足音と魔力灯の光が来るのを待つ。  
音をから判断するに今は十メッセと言った所か………五、四、三、二、一…よし、今！

身を屈めて岩から飛び出し、相手の判断がつかない内に喉を下からナイフを突き上げる様にして突き刺す。こうすれば声を上げられないからだ。

素早く喉から短剣を抜き、倒れた体が地面に落ちて音を経えないように体を支え、「ドサツ」…支える

(音を経えないようにしてくださいよ！)

(仕様が無いだろう！私はお前と違って長剣なんだから！)

(それはそうですね…もうちょっと何とか『おい、何か倒れるよ』うな音がしたぞ』ほら！こうなったでしょう！)

(くぬっ…どうする！)

(どうするも、こうするもないでしょう。やるしかありません)

(だが、奴等警戒して人数を増やしてきたぞ)

(…魔術を使います、イレエナは感覚共有を切ってください)

(…すまん)

(この分は、最悪の場合に凶になってもらう事でキャラにさせますよ)

(よし、切ったぞ)

(了解)

よし、これでイレーナに見られることは無いだろう。なるべくは人前では使いたくないが…まあそんな事を言ってる場合でもないか。

(“変化”…砲腕・”圧縮”…殺人者の刺突剣<sup>マイターレイピア</sup>)

まずは変化により、腕の内部をスライムに変化させる。次に投げナイフを両腕に装填。そして、こちらに近付いてくる四人の巡回を確認し、素早くやや後方に位置する二人のゴブリンに狙いを付ける。

(…発射)

狙い通りに二人の眉間にナイフが刺さるのを確認するまもなく、直ぐに両腕にナイフを装填し、残った二人に向けて発射する。

ドサツと四人分の倒れる音がほとんど同時に洞窟に響く……どうやらもう近くに巡回は居なかったらしい

(ちょっと待っててください。ちゃんと倒れたか確認してきます)

(分った)

死体の近くまで這うように進み、ナイフを回収する。これを見られたら、色々と不味いからな。さて、イレーナの所まで戻ろう

(大丈夫でした。感覚共有を付けても大丈夫ですよ)

(…本当にすまん、私から勝手に依頼を受けたのに…)

(まあ確かにそれはそうですね)

(面目ない…つい、相棒が見付かったのが嬉しくてな)

(見付かったと言うか捕獲されたって感じですけどね)

(ま、まあ確かに、少し強引だったな)

少し？あれがその程度だったら押し売りなんてものは存在しない…

(まあもういいですよ…それよりも早くこの仕事終わらせましょう)

(…そうだな、すまん)

(あんまり、謝ってる一回の誠意が薄れますよ)



(…了解)

それ以降はこれと言った会話も無く、巡回をこつそりと倒しながら  
淡々と奥へと進んでいった。

すると、やがて多くのゴブリンがいる大きな広間のような場所にて  
た。

(どうします?)

(どうすると言われてもな…今更帰って増援を呼ぶわけにもいかな  
い、やるしかないだろう)

(けど、あの人数ですよ?)

(確かに多いが…そうだなあの通路なら狭いし、そう何匹も来れな  
いだろう。あそこで戦えば問題ないと思う)

(…ああ、なるほどあの通路ですか…確かにそれなら…じゃあ、や  
りますか)

(まあ待て、私が道を切り開く。ここらで名誉挽回しておかないと  
な)

(…だったらお願いしますかね)

(ちょっと下がってろ…)

そういわれ、ゆっくりと後ろに下がる。するとイレーナは目を閉じ  
小さな声で詠唱を始めた。

「炎から生み出されし、小さき者よ、我が手に集いて剣となれ”火  
片の剣”」

唱えた瞬間、イレーナの手にその身の丈ほどある細長い剣が現れる。  
間違いなく、普通に作つたら簡単には振れないだろう。剣をイレーナ  
は軽々と片手で構える。

(では、行ってくる)

(ええ、あとから続きます)

「すううう…はああああ!!」

イレーナが雄叫びをあげながら、真っ直ぐに通路の方へ駆け出す。  
途中何人もゴブリンが立ち塞がるが、右手に持っている剣を一振り  
するだけで次々と体を焼き切られて倒れていく。

「ルフト何をしてる！早く来い！」

「と確かに！こんなぼけつと見てる場合じゃなかった。」

「了解！」

慌ててイレーナの後を追う。が、イレーナの剣の範囲に居なかったゴブリンがどんどん俺の前に立ちふさがる。

『死ねえ！』『よくも仲間たちを！』『人間めえ！！』

「くそ、邪魔だ！」

…左の奴は縦振り、正面は突き、右は右袈裟切りか：ここでバツクして避けるのは簡単だが、そうなるにあつちに行くのに支障が出るな。あつちはあつちで余裕がなさそうだし：少し使うか。

やや中腰になり、両腕と左のふとももにナイフを装填、両腕を左右に、左膝を正面に向ける。

「殺人者の刺突剣」

狙い通りに着弾。今の所、遠距離に攻撃できる技はこれぐらいしかない、いつか増やしたい所だなと思いつつ通路へ急ぐ。イレーナも確かに道を切り開いているのだが、いかんせん俺が出遅れたせいで道が出来てもすぐにゴブリンで埋まってしまう。

これは埒が明かないな：全くあれほどなるべく言霊は使っなくなって言われたんだけどなあ…

「圧縮”：重蹄脚”

圧縮と言っても一秒ほどしか溜めてないため、大した飛距離は出ない。が、イレーナが開いた道にたどり着くならこれぐらいの跳躍で十分だ。

段々と通路が近くなっていく、よしあとちよっくそ、デットの仇！』と言う所で一人のゴブリンが横から持っていた剣を投げつけてくる、その剣が綺麗に俺の腕を跳ね飛ばす。

『やった！あの男の腕が「つとあぶね」えっ？』

危ない危ない、今の見られてたら完全にアウトだったな、と言うかまた痛覚作り忘れてたよ、気を付けないとな。

気を取り直して前へと進み、遂に通路までたどり着く。

「はあはあルフト大丈夫か！」

「ええ、何とかってイレーナ息が荒いですよ、大丈夫ですか？」

「こんなに息が上がるような距離では無かったはずだが…？」

「はあはあ、はあ…ああ大丈夫だ、それよりも足を止めるな、ここではまだ広すぎる」

「了解」

言われたとおりに足を止めず、どんどん奥へと進んでいく。普通の人間だったら息が上がるんだろうが、俺は変化で両手のひらから息を吸っているため問題ない。もちろんばれない様、表向きは息を荒げているが。

「はあはあ…よし、ここまで来ればいいだろう」

「はあはあ…ええええ、ゴブリンはまだ全然追いついてないみたいですね」

「ああ、ゴブリンは人間よりも身体能力は低いからな、数さえいなければ怖くない」

「ふう、ちよつと休憩できますね」

「ああ…ん？ルフト何か足音がしないか？」

「ええ、もしかして後ろからも来てるんですかね？」

「まあそれでもこの狭さなら問題ないが…」

しばらく、耳を澄ましていると、ずんっずんっずんっというどう考えてもゴブリンには程遠い重い足音が聞こえる。

「これってもしかして…」

「ああ、最悪だオーガがいる」

オーガ・ゴブリンも属している魔界六大氏族の一つ鬼族の中でも有数の強さを持つ種族だ。平均身長四メッセ、体は筋肉隆々で、鉄でできた金棒を持っている。ちなみに好物は肉と豆。人界では豆を投げて鬼を追い返すと言う行事があるらしいがそれでは逆に鬼を呼び込んでしまうと初めて思い出した時には思った物だ。

「どうします？」

「お前が言ってた通りにする」

「えっ?」

「最悪の場合は私を囷にすると言っただろう?」

「いや、あれは冗談で…」

「だが、私が此処に来ることも含め、今回失態が多かったのは事実だ」

「そうですね…この通路に来ることに關しては…」

「なら、ここは私に任せてお前は早く行け」

「止めてくださいよ!そういうのって長い間旅した仲間たちが言う台詞でしょう!」

「まあ確かに小説ではそうだが…現実と小説をごっちゃにするな、それよりもほら、後ろ向いて見ろ」

…そう言われたってことは間違いなく…

「やっぱりですか…」

「そこは「うわあ!」とかじゃないのか?」

「現実と小説をごっちゃにしないでくださいよ」

「ははっ成程…それじゃあな、ルフト」

「…生きて帰ってきてくださいよ」

「ああ、任せとけ…さて、待たせなオーガ、そろそろ始めようか」

『うん、娘っこが相手か?全く最近の人間の男は情けないのう』

「何をボーっとしてるルフト!早く行け!」

「くそっ!」

イレーナに背を向け全力で逃げる、逃げる、逃げる!段々と後ろの足音が小さくなっていく…間違いなく、今俺は相棒を犠牲にして逃げているのだ。

此処で彼奴を放っておけば…いや、やっぱり助けなきゃ!とか迷うのが何時もの俺なんだが…そんな事してる時間は無いよな…

「はあ、さつさと済ませて帰るぞ…」変化…顔よし、声よし、髪色よし、体格は…やってる時間無いから…筋肉をちよつとだけ付けとくか」

現在の俺は、金髪碧眼の美男子になっていた。ちなみにこれは人間

の体を基礎に他の動物をいろいろ混ぜ、苦心して創ったものだ。  
まあ創ったのはいいものの、いかんせん一年以上同じ顔で過ごして  
たから愛着が湧いて、結局顔を変えなかったのだが…まあ役に立っ  
て良かった。

「よし！行くかって、危ない危ない、相棒印の機能を感じ共有を以  
外、全部を切つてと…よしこれでいい」

「重蹄脚！」

自分が持っている全能力を駆使して、俺は逃げてきた道を真っ直ぐ  
に進む。

第七話：あいぼう（前書き）

今回の後書きはやたらと長い上に小説には一切関係ありません。  
なので、後書き読むのは面倒臭いと言う方は飛ばしてもらっても全  
然大丈夫です。

## 第七話：あいぼう

跳ぶ、跳ぶ、跳ぶ！床、壁、天井、あらゆる場所を使って前に跳び進む！

さつき逃げてきた道が全然別物に感じる、こんな時なのに久しぶりに全力を出せる解放感に体が打ち震える！

どンドン吊り上って行く高揚感に顔面の笑みが最大になった瞬間、オーガの姿を遠くに確認する。

…どうせ今は顔も何も全然違うんだ！このまま…！

「どっせええい！！」

『な、なんあがぁ！』

「な…！」

その勢いに任せ、オーガの体に体当たりをかます。めきめきとオーガの骨が折れる音が耳に心地いい！

「ヒヤッハー！どんなもんじゃい！」

「お、おいお前は？」

イレーナの声聞き少し頭が冷め、上がりつ放しだった高揚感がゆつくりと下がり始める。そして、下がり始める高揚感の代わりに、上がり始める羞恥心。

…なにがヒヤッハーだよ、俺…と言うかどっせええいって…

「おい！聞いているのか！？」

いかん、脳内一人反省会は帰ってからにしよう。

「おっと、すまん、すまん、で？なんだ」

「だから、お前は何者かと聞いている！」

イレーナの方を振り返ってみれば、しっかり剣をこちらに向けて構え、警戒心全開だ。まあなんかいきなり現れて体当たりでオーガを吹っ飛ばす人を見たら警戒もするわな。

「まあそれに答えても良いんだが…とりあえずはあのオーガの相手をしないか？」

「…そうだな、怒鳴って申し訳ない。あまりの光景にこちらも冷静じゃなかった」と言ったら言い訳になるだろうが…」

いえ、全く持つて正しいと思います。まあ俺だったら話しかけずに文字通り跳んで逃げるが。

「いえいえ、全然気にしてない、気にしてない。さてつとやりますか…あつあんたは下がつてな、ここは俺に任せて休んでおきな」

「いや、そういう訳には…」

「おい！」

目の前で、イレーナがぐりと倒れる。…気を失っただけか…だが、顔色が余りよくないな…血色が喰急に悪くなる。そしてこの気の失い方からして…『はあはあ…ぶ、ぶち殺してやるぞ…人間があー！』ちっ、起きやがったか。気にはなるが…すぐにどうという感じではなさそうだ。ん？金棒を持ってないな、さては腕でも折れたか？

『おいおい、何寝ぼけたこと言ってるんだ？その雑魚』

『なっ…！汚れた人間が我々の言葉を…！？いや、それよりも…お前、今、雑魚と言ったか…？』

『いや、言つて無い』

『貴様…よくも言つてくれたな…！』

おい、俺言つて無いって言つたぞ。全く…聞こえてるくせに聞き直して来るのはどうかと思う。

「喰らえい！」 オックスアンストゥルウム（火牛の突進）”！」

「喰らえて言われてもな…っ！」

こちらに突進してくる火牛を紙一重で躲す。危ない、危ない”概念魔術”は出が早いんだから全く。

概念魔術・人間側の魔術である”詠唱魔術”と違い…って詠唱魔術については言つたけな？…言つて無かつたな。

では、簡単に言わせてもらつと詠唱魔術は魔術を使う際に詠唱を行わないといけないが、その代り無駄が無く効率が良い。

対して魔族側の概念魔術は、詠唱が要らないものの、その姿はど



うしても概念に縛り付けられ、無駄が多くなる。

ちなみに、今回オーガが放ってきたものには”火”に”雄牛”の概念を付けられていて、その火の雄牛をこちらに突撃させている訳だ

「それじゃあ、次はこっちの「オックスアンストウルウム！」のわっ！」

「くっ、今度こそこっちの「オックスアンストウルウム！」うおっ！」

「っ、次こそ「オックスアンストウルウム」うわっ！」

くそ、この野郎…見てろよ…！

避けつつ溜めてあった、左足の圧縮を解放、右の壁へ大きく跳ぶ、次は同じように溜めてあった右足を壁に着き、オーガの真上の天井へと跳ぶ、そして、最後に両腕を使って天井から床へとお…跳ぶ！

「おらよっ！」

「ぬおっ！」

くそ、避けられた！が…まだ、撃つ手はある！

「殺人者の刺突剣！」

「くっ！」

…大柄なくせにやけに素早い！だが、こっちが一本しか撃てないと思ったら、大間違いだぜ！

「お次は左の二本目！」

「痛っ！」

ちっ、避けるなああいつ！右腕にちよつと掠ったぐらいか！くそ、もうナイフも打ち止めだ！

「ふん、打ち止めだろう！どうやってナイフを仕込んだか分からんが、その体からして腕に一本づつ、あって両足の太ももに一本づつ、しかし、その体勢からは『台詞が長い！』なっ！」

「ナイフが無いのならあ！小石を使えばいいじゃない！」

天井を跳んだ際に腕に食い込んだ…と言うか埋まった、小石を乱射

する。

『どらどらどらあー！』

『くっ、ふっ、はっ、ぐう！』

『よっしゃー！』

乱射した小石の一つが、オーガの足を撃ちぬく。よし！ここで一気に近づく！

『はあ！』

『くっオック』そう何度もやらせるかい！』かはっ！』

近付いてからの首絞め、これなら魔術も放てまい！

『と言つても殺す訳にはいかないから…』変化…蛇腕』

器用に全身を拘束しつつ、右腕を麻痺毒をもつ毒蛇へと変化させる。

『よいしょっ』

『ぐうっ！…はあっはあっはあっ』

『俺が微調整しながら”圧縮”した麻痺毒だ、しばらく息をするのも辛いだらう。まっ安心しな死にはしない』

『何が…はあっはっ目…的だ』

『…後に分かるさ、お前には悪いけど、しばらくそのままにさせて貰うよ。俺はちよっつと掃除をしないとイケないんでね…』

『貴様！かっはあっはあっ…』

『怒鳴らない方がいい、怒鳴ったり叫んだりすると苦しみが増すぞ…まあ…そこでゆっくり待ってる』

まだゴブリン共の足音が聞こえない。今なら…大丈夫か。

『”全身変化”…奇獣…基礎大狼』

ごきつばきつと相手から聞こえるならばいいが、自分の体からなるとなるとその意味合いは百八十度違ってくる。

その音色は痛快から不快となり、愉悦から苦痛へと変わる。それが自身の手によるものであってもだ。

自分の体がどんどん変わっていくのが分かる。今の俺は筋肉や骨、内臓、皮膚そんなものが異常な速度で変わっていく、その姿は間違はなく化け物だし、小さいお子様にはお見せできない。

そして、待つこと三十分、ようやく完成だ。

基礎は大きな狼で、四匹の大蛇が胴体から生えている。ちなみにこの蛇にはそれぞれ違う毒があり、今回はその脳をも創つてある為、自動で行動すると言う便利さだ。

物語で言えば間違いなく敵役、と言うかこの姿、挿絵にしたら小さい子供にはトラウマものだ。

『ばっ！はあーふーはああふうう…ばけ…ものがっ…はあっはあっ…俺からすれば…いや俺達一族からすれば、人間や魔族の方が物語の化け物よりも万倍化け物だったけどな…とちよつと暗い過去を振り撒く演出を勝手にしながら広間へと急ぐ。』

…一分も経たぬうちにゴブリンの姿が見え始める、さて…と仕事の時間だ。

## エネミー side

”それ”の到来は誰も予想しなかった。 ”それ”の姿は今まで見たどんなものよりも恐ろしく、どんなものよりも異常だった。

どんな優秀な学者でも ”それ”の進化の過程を知ることとは出来ないのではないか、いや疑問形にするまでもなく、出来ないだろう。

そう、確信する。 ”それ”は巨人族ほど大きく、見た目は一見すれば狼と思えるが、その身からは四本の大蛇が生えていた。

”それ”は我らを蹂躪…と言うのも生ぬるい程に我らをただただ殺していった。

ある者は ”それ”の爪に引き裂かれ、ある者はその脚に蹴散らされ、ある者は ”それ”の持つ毒にやられた。

目の前にあるのは現実なのだろうか？違つ、これは悪夢なのだ。そう言い聞かせる事は容易い。

だって目の前にあるのはどう考えても悪夢そのものだ、たとえ現実

であつても目の前にあるのは間違ひなく悪夢、現実なのに夢、矛盾しているようだが間違ひなく、今目の前にあるのは現実にある悪夢だ。

…いかん、こんな事を考えてる場合ではない。  
私も呼吸が辛くなり、意識が何回もぶつ切りになつてから随分と経つ。

死を避けることは出来ぬだろうが、せめて私が見た悪夢を国に知らせなければ…全ての力を総動員し、生まれたての小鹿が歩くようなたどたどしい手つきで自分の瞳に手をかける。

二本の指にゆつくりと力を入れ、ずぶずぶと指を隙間の中に入れていく。痛みは感じない、血が流れているのだろうがそれも感じない。視認しなければ眼球が確かに手に載っているか分からない。ゆつくりと手を残っている目に近付け、しっかりと手のひらに載っているのを確認する。

残っている力を振り絞り、僅かに声帯を震わせる。

「…フォ、フォーゲン・ウーアクンデ…」

段々と意識が黒く塗りつぶされていく、だが恐れはない。最後に”

それ”の事を国へと送ることが出来たのだ…心残り…あるとしたら…孫の顔を見れなかつたことぐらいか…

ははっ…全く…早く結婚しないから…ああ…くそっ思い出してしまつたなあ…いやだなあ死にたくないなあ…

### side out

虐殺が終わり、自身の体を元に戻す。虐殺に関しては…謝りもしないし、罪の気持ちも無い…いや、それは無理だな。

しかし、間違ひなくこいつらもどこかで俺達を迫害してきたはずだ、俺は正しくは無くとも悪くは無い…

「…くそっ」

言い訳に一族の境遇を使っている自分に腹が立つ。割り切ったはずの殺すと言う行為の重さに改め愕然とする。

「だけど…こつちだつてここで死ぬわけにも行かないんだ」

そんな事を呟いて、俺はその場から足早に逃げた。

体が重い…やつぱり使い過ぎたか…もう、このまま倒れて寝たい…  
がそういう訳にもいかない…：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…  
やっとな、オーガの姿が見えてきた、  
重い体を引きづりながらオーガの元へと急ぐ。

「はぁーはぁー貴様…貴様ぁぁ！はあつぐつ」

「…悪いな、こつちも…なりふり構っていられないんだよ…」吸身  
”」

「な、なんだ…これ…は…意識が遠の…」

「痛みを無くすコツは掴んでる、せめて痛みなしに死んでくれ…」

少しずつ名も知れぬオーガの体を、意思を、記憶を、そして…魂を  
吸収していく。

一時間ほど掛けて吸収し終え、瞼を開くと視界がぼやけている事に  
驚き、自分に怒りを覚える。

なんて…なんて…勝手…！狼や蛇、言葉が通じない動物を吸収した  
ときは罪悪感を覚えず…ただ、自分の力が増えたことに喜んだのに  
…！

「少し言葉が通じるたら…！これかよ…！」

どんだん瞳から水があふれてくる、止めたい、が止められない、く  
そつくそつ…！

「…泣いて…いるのか…？」

「！起きたのか…？」

「泣いて…いるのか…？」

「…ああ、泣いてるよ…だが、これは…俺の問題だ、なんていうと  
恰好を付けてるで嫌なんだけどな…」

「ふん…まあいい、私からのアドバイスだ、お前が誰だか知らんが

…泣きたいときは泣け…泣き終わったら…立ち上がれ・誰だって泣きたいときはある…挫折、裏切り、死別…泣くのにはいろいろな原因がある…誰だって泣く…だがそのままでは泣いてばかりでは進めない…だから、立ち上がれ、立ち上がって叫べ。俺は立ち上がったぞ、まだやれるぞってさ…そうだろ？」

「…本から引用するときには、ちゃんと出展を明示しないとダメですよ…」

「ふふ…ばれ…た…か…」

また気を失ったか…やれやれ…体がきつかったらうに…さっきの症状からしてこれは魔力欠乏症だな、魔術を使いすぎたらなるならしいんだが…なのにこいつは…

「ふうありきたりだな。だがまあたまにはいいか…さて、帰ろう…」

成り行きで出来た相棒を背負いながら車へと帰る道中、人生を道に例えるなら予定とは全然違つていているが、或いはこれが最高の道だったのかもしれない。そんな事を思っていた。

## 第七話：あいぼう（後書き）

どうも、生意気ナポレオンです。

ひとまずここまで読んでくださった方へ感謝を。

本当にありがとうございます。<（）>

…では、少し言いつらい…：…というか今更な上に身勝手な話なんです  
が。

感想やご意見などがございましたら、どしどしお願いします。

いや、なんで急にこんな事を書こうかと思っただかと言つとですね…  
書いてる自分が言うのもなんなんです、非常に見辛いと思つんで…  
すよね、自分の文章。

なので、もしよかったらと言つと図々しいんですが、

「こつしたら読みやすい」などのご意見がございましたら、是非お  
願い致します。

…「自分で勉強しろ」と言われたら…：正直、反論できませんね。

では、長文失礼致しました。

## 第八話：病（前書き）

今回、新しく”リズ”という単位が出てきますが、これはお金の単位で”リズ”＝一円です。本文で一円と書くわけにもいかないので、ここで書かせていただきました。では、また後書きで。



## 第八話：病

「やれやれ、やっと着いた」

あれからしばらくし街に着いた頃にはとつくに夜も更けており、そんな時間に俺はイレーナを背負ったまま人に聞けず、標識頼みで”

ヴェツサー個人医院” そんな看板が掛かっている建物まで来ていた。

「すみません」

扉を軽くノックすると、扉から医者が少し顔を出した、年齢は恐らく三十歳代だろう、若干のつり目に不揃いなあごひげ、こういうとやぶ医者っぽいのが、その鋭い眼差しを見ればその印象は掻き消える。

「なんだ？こんな時間に……」

「深夜にすいません、実はこの人が……」

「気を失ってるな……何があった」

「魔力欠乏症だと思っただけですけど……」

「魔力欠乏症だと……！おい、早くこっちに運べ！」

「りよ、了解！」

その剣幕にたじろぎつつも中に急いで運ぶ、しかし欠乏症ってそんなに重い病気じゃなかったはずだが？

「そのベッドに寝かせろ！ええと、違うこれじゃなくて……これだ！これとこれを……」

ベッドにイレーナを寝かせ、ただポーッと突っ立つ、何かできないかと考えはするが、こと医療において素人が手を出すのは間違いない、足手まといだし危ない。目の前で薬を調合する姿を黙ってみるしかない。

「よし、出来た……おい！その腕の血管を押さえつけろ！ほら、早く！」

「は、はい！」

腕の根本の血管を止め、血管を浮き出させる、そこに医者は素早く注射の針を刺し、さっと薬を注入する。

「取り敢えず、これ良いだろう」

「迅速な処置ありがとうございます…と聞いたんですが…魔力欠乏症はそんなに危ない病気じゃないはずでは？」

「……………世間ではそう言われてるな」

「その言い方からすると…実際には違う…と？」

「ふん、信じるか信じないかは別だがな」

「…一応、教えてください」

「一応…ふん、まあいい。建前だけこつちを信じるやぶ医者よりはましだな」

「やぶ医者？あなたも医者でしょ」

「ああ、元軍医だ」

「軍医？だけど軍医って、法律で辞められないはずじゃあ？」

「辞められないねえ…お前はなぜ軍医の辞職は認められてないか知ってるか？」

「將軍など位の高いものや、異能者などのカルテの情報が洩れたら不味いから、また、実際に起こったことがあるから…でしょ？」

「ふん、教科書そのまんまだな」

「では、そうじゃないと？」

「いや、勿論それも理由の一つだ。だが他にも理由がある」

「理由？」

「そうだ…魔力欠乏症には死亡例があるという理由がな」

「死亡例！？…可能性はどれ位なんですか？」

「数的言えは戦っている兵士の精々1%行くか行かないぐらいだろう。だが…」

「確実に死亡者は出ています…兵士にはなんて？」

「過労死、医療ミス、事故…理由は何でもアリだ。医療ミスなんて書かれた時には、担当医にされている奴がリンチを受けて全治三か月の怪我を負ったこともある」

「まあ確かに筋は通ってるんですね、今現在に行われている訓練方法は…」

「自分の魔臓を酷使し、筋肉と同じように鍛える。要するに魔力欠乏症にすることがほぼ前提だ。それでも効率が良いとは言えないのに……この事が明らかになつた暁には……」

「効率が悪いどころの話ではない」「

「でしょ？」

「……声を合わせるな気持ち悪い」

「まあしかも、魔術兵の士気も落ちますしね。今まで全部使つてなれば、じゃないですけど全部使い果たしても気絶ぐらいだったのが急に低いとはいえ死ぬ可能性あると言われたら……無意識にでも意識的にもストッパーが掛かつて弱体化する可能性は大にあります」「その通り……で、信じる気にはなつたか？」

「うーん半分くらいですね、嘘を見破る魔術もあつたと思いますが、あれは……ねえ」

「嘘を本気で信じている場合には効果をなさない、まっ要するに狂信者や頭がどうかしている奴らには意味が無いっていう事だな」

「ま、あなたがそうだと云つてる訳じゃないんですが……その可能性が0ではないですしね。やぶ医者と言つた理由もそういう事でしょう？」

「ふん、あの時の猫なで声と屈辱は今でも忘れられん……にしても此処まで話を聞く奴も珍しいな……お前、名前は？」

「ルフト、ルフト……ゼーレです。そちらは？」

「ヴァッサー、ヴァッサー……アーツトだ」

「まっ今後ともよろしくつてことで、ところで一つ気になったことがあるんですけど聞いていいですか？ヴァッサーさん？」

「なんだ？」

「ほら、こういうとまた怒るかもしれないですけど……どうやって軍を抜けたんですか？」

「……俺にも色んななつてがあつてな」

「今のは嘘ですよね」

「……嘘じゃない」

「いえ、いいですって、これ以上聞いたりしませんから。という事でこの話は無かったことにして…あの女性…イレーナに打った薬ってどんな薬なんですか？」

「魔臓活性化薬。名前の通り、魔臓の活動を活発にして、魔力を何時もより多く、そして早く生み出す薬だ」

「成程。だけど、なんでその薬って持ち歩かないんですか？」

「そんな事も知らないのか…？この薬はだれも作って三分以内に注入しなければその効力が無くなる」

「そうなんですか…それじゃあイレーナはどれぐらいで目を覚ますんですか？」

「大体あと四、五時間はか…ここは…？」か…る」

「って起きましたよ？」

「…分かってる。しかし、余りにも早すぎる…この速度で目を覚ますの精々早いものでも四歳や五歳そこらだぞ…！もしかして、お前さん…！」

「…ああ、魔臓発育障害だ」

「魔臓発育障害？」

名前から大体想像できるが…いかんせん、魔術関連の知識は対抗策以外殆ど勉強してないからな…

「やれやれ、ルフト。魔臓発達障害も知らないのか？」

「…ええ、全く。魔術関連は疎いもので」

「おい、ゼーレ！そんな軽く…！」

「誰だか知らないが気遣いは無用だ」

「しかし、お前さん…」

「まあ確かに色々と面倒事はあったが…大したことではない」

「どんな、病気なんですか」

「…魔臓発育障害。名前の通りに魔臓の発達に支障がでる先天的な病気だ。三歳から五歳の間に発症し、発症した年からは魔臓が殆ど発達しなくなる」

「それって…魔術師としては…」

「かなり致命的だ。魔臓発達しないという事はつまり、魔力の総量が増えないという事だからな。魔創士なんて資格を持つてるのになぜ、ギルド員なんてやっていいのか、理由が分かっただろ？」

「その…言い方は悪いんですが、よくそんな魔力の量で魔創士の資格を取れましたね」

「ははっよく言われるなあそれも、まっ口に出して言うのもあれなんだが…影での努力は半端じゃなかったぞ」

「…まあそうでしょうね」

「なんだ、もうちょっと尊敬の眼差しで見てもいいのだぞ」

「いや、僕もそれなりに人生波乱万丈なもので」

「ふ〜ん、まっお互い…」

「詮索は無しにしようか…でしょ？貴方がそれを言います？」

「うぐ…」

「おい、俺だけシリアスにしたまま放っておくのは辞めてくれないか」

「おっと、すいません」「も、申し訳ない」

（お、おい、ルフト）

（なんですか？）

（今までその場の勢いで気にしなかったが、あの男は誰だ？）

（空気で分かるでしょ、あなたを治療したお医者様ですよ…それなのに、あなたと言ったらお礼も言わず）

（だって仕方ないじゃないか、起きたらあの男が真剣な顔で「もしかして、お前さん…！」とか言ってくるんだから！）

「……………ふう〜」

「…あつ…」

「全く、お前ら、さっきの魔臓発達障害云々はもうちょっと重い話題なんだが」

「いや、そこら辺は分かっているんですけどね、僕も結構そういうの経験してるんで…」

「あつお前！私が受けた差別も大概だったんだからな！」

「お前ら……！」

「「すいません！」」

「はぁ〜もういい……治療代千五百リス、ほら」

「「……………」」

（おい、ルフト……）

（え、っ僕ですか……）

「……………」

（ほら！指で机をコツコツと叩き始めたじゃないか！）

（だったら……イレーナがやればいいじゃないですか！）

（私は口が上手くないんだ！）

（嘘を着かないでください！貴方にはめられたの忘れてないんですから！）

「はぁ〜ん、んん！」

（おい、遂に足音を鳴らし始めたぞ！）

（分った、分かりましたよ！後悔しないでくださいね！？）

（ああ、もちろんだ）

「あの……ヴァッサーさん」

「……………」

こゝ、怖い……だが、ここを乗り越えたら……！

「実は僕たち無一文だったり……」

「……………」

「だ、大丈夫です！お金は勿論支払います。丁度依頼が終わったところですから僕が今からギルドにお金を買いに行つてきます。もちろん人質として、イレーナはここに置いていきます」

「なっ……ルフト！」

「丁度、こちらのイレーナもお礼やら、自己紹介やらしてない事ですし……！」

「よし、早く行って来い」

「了解！」

「ル、ルフトオオ！」

すまん、イレーナ！日が昇るまでには戻ってくる、それまでその空気に耐えていてくれ…！

某有名短編小説の主人公の気持ちを味わいながら俺はギルドへと向かった、あっあれは日が沈むまでだったけな？

### 三十分後

ふう、また迷ってしまった。って言ってもまだ来て一日も経ってないからな、しょうがない、しょうがない。と言い訳しつつギルドに入る。

「さっ、早く報酬を貰わないと…」

やや駆け足で報酬カウンターの方に向かう。

「すいません、報酬を受け取りたいんですけど…」

「分かりました、ではライゼカードをこちらに」

「ええ…と…はい」

「はい、ではしばしお待ちを…」

「…すいません、なんでライゼカードがいるとか聞いてもいいですかね？」

「昨日作って頂いたライゼカードはギルド仕様となっていて、討伐した魔族の種類名、数などを半径五百メッセ以内なら感知してくれる優れものなんですよ」

「へへすごいですね」

「ええ、ギルドも自慢してるくらいですから…とこれですね」

ん？そう言えば討伐した魔族の種族名が出てくるんだったら…不味くないか？

「新人さんなのにゴブリンとは言え凄い数倒してますね…へっ？」

不味いよね？やっぱり不味いんだよね？うん、ゴブリンはまだ良い、

「ただどあつちの方は…！」

「オーグウ！」

慌てて、口を塞ぐ半分ぐらいアウトだったが、幸運にも近くに人は居ない。この人以外にはばれてないだろう。

「す、すいません」

「な、何をするんですか！」

「いや…その…」

「何なんですか！」

ううん、大声で話すのはまずい。俺はすつと耳元まで口を寄せた。  
（オーガの件なんです、が、ちよつと内緒にしておいてもらえませんかね）

（なんでですか、これが広まったら期待のホープなのに…）

（いやまあちよつとこちらにも事情があると言うか…）

（けど、こちらとしましても報告義務が…）

（そこを何とか…！）

（…分かりました、今から私が放つ魔術に大人しく当たってくれば考えましょう。安心してください、攻撃性のあるものではありません）

（それで、内緒にしてもらえらんだつたらなんでもいいです）

（では…「欺瞞に満ちし言葉を白日の下に」ストーリーリアルビトゥ虚実の裁定」）

（…どうです？）

（…見なかつたことにしておきます）

（ありがとうございます）

（なんの事です？）

「それでは、ゴブリン二十五匹と…一匹で討伐報酬が三万五千リズ、依頼料二万円から二割を引いた一万六千リズを足しまして、報酬はして五万一千リズです。お確かめください」

「…はい、確かにあります」

「ご依頼完遂、お疲れ様でした」

「そちらもお疲れ様です」



その後、ヴェツサーの所に戻るとイレーナがなぜか手料理を振る舞っていたり、それがやけにうまくったりと色々あったのだが…まあそれはそれという事で。

## 第八話：病（後書き）

どうも、生意気ナポレオンです>（――）<  
今回、書くのがやたらと時間が掛かりました：何回見直しても、な  
んか

文がおかしく感じてしまつて、

実は投稿してはいるものの、本文も納得できてなかつたり：

「だったら出すなよ」と言う話ではあるんですが（汗）、

早く次に進みたいと言う気持ちの方が大きくなつちやいました、  
すいません、今回はこんな文で押し切らせていただきました。

次話、次話でこそもうちょっとましな文章を書きますんでどうかご  
勘弁を！

補足

今回、報酬の内訳みたいなのがありました、  
ゴブリンは一匹2000リズ、オーガは一匹五千リズで報酬はカウ  
ントされています。

## 第九話：異能者

午前八時、俺とイレーナは大通りで落ち合い、ギルドへと向かっていた。

「にしてもよかったのか？本当に私が相棒のままです…」

「良いですよ、別に」

「…まっお前が良いって言うんならこっちは都合がいいんだがな」

「そうそう…ふああ」

「眠いのか？」

「ええ、朝は苦手なもので…ふああ今日はどんな依頼します？出来れば今日は楽なのがいいんですが」

「まあ確かに昨日は色々あったらな、今日は軽めの仕事にするか」

「ええ、そうしましょ、そうしましょ」

早朝の風に身を震わせながら、ゆっくりと前に進む。

「にしてもお互いにギルドから遠い場所に宿をとったな」

「しょうがないでしょ、ギルド周辺は宿代が高いんですよ、まああの周辺はギルド以外にもいろいろと便利ですからね」

「そうだな…おっやつと見えてきたぞ、早く入ろう」

「はいはい、あゝ寒い」

「はいはい、あゝ寒い」

小走りで扉に近付き、扉をあまり丁寧とは言えない手つきで開ける。

「ふう、温かい、やっぱり寒いのは苦手だ」

「あれ、イレーナもなんですか、僕も寒いのが苦手なんですよ」

「へ、そうなのか」

「イレーナさん」

「おっどうしたカツツエ」

「いや、イレーナさん達向き…というかそちらの方向きの依頼があるんですけど、やりませんか？」

「おい、そこ、僕の名前は覚えてないのか」

「どんな依頼なんだ？」

「ええ、これです」

「何々……」

「いや、無視ですか。おい、僕の名前は……」

「成程、確かにこれはお前向きだぞ」

「はあ……どんな依頼ですか」

「最近住民地区で活発化してる不良チームを解散させることだそう  
だ」

「……疲れそうな依頼ですね……今日は軽めの依頼にするはずじゃ？」

「まあ聞け、この依頼……報酬が滅茶苦茶良い」

「それ確実に何か裏がありますよね」

「安心しろ、その理由も書いてある。その不良チームのリーダーが  
だな”異能者”だそうだ」

「……聞き間違いですよ、異能者なんて単語が聞こえたんですが」

「もう一度言おう、異能者がいる」

「……あのですね、昨日でさえ散々色んなことあって疲れてるのにで  
すね、異能者？冗談じゃないですよ。大体どこが僕向きなんです  
その依頼！」

「そう焦るな、その異能者の能力を聞けば分かる……能力名”拳通  
士”、名前の通り拳……と言うより肉弾の攻撃しか通らない能力だ」

「また駄洒落臭いネーミングですね……拳闘士と掛かっているんですよ、  
ね、それ……まあ確かに？得意武器にわざわざ拳だなんて書いてし  
まった僕向きではありませんけど……」

「聞くだけでも行つて見ないか？」

「……聞くだけで終わるなら行つて見るんですけどね……ちなみに報酬  
は？」

「一人当たり、十万里ズだ」

「じゅっ十万！？……仕方ありませんね、やりましょう」

「だそうだ、カツツエ」

「了解しました、こちらで手続きは済ませておきましたので、どう  
ぞ行つてらっしゃいませ」

「すまないな、じゃあ行ってくる」

「ルフトですからね、今度こそ名前覚えておいてくださいよ、それじゃ」

「では、行ってらっしゃいませ、イレーナさん」

…もつ何も言うまい。

#### 依頼人屋敷前

広さがおよそ普通の家二件分ほどもある屋敷が今日の依頼人の住所だった。

普通の家二件分と言うとあまり大きくない様な感じがするが、実際にはかなり広いからね、二件分。

「豪邸ですねー」

「ああ、この屋敷の主人は元はギルド員でかなり有名だったみたいだ。人望も厚くて中々の好人物らしいぞ」

「成程：それなら、チンピラを一掃したいとなんて言う個人で依頼をするのも頷けますね」

大体こういう依頼は周囲の住民で集金して、ギルドに頼むものなのだ。

「そうだな…呼び鈴押すぞ」

カーンと良く響く音がなつてからしばらくすると屋敷の方から、五十歳ぐらいだろうか？まあ大体それ位に見える人物がこちらにやって来た。

その姿は適度な筋肉に包まれ雄々しく、歩く姿には一切の無駄が無い、顔にはいくつかの傷が走り、まさに老兵と言った感じだ。

「よく来たな！姉ちゃん達」

…なんか見かけと話し方違うな。

「どうも、ギルド員のルフト、ゼーレです」

「同じくギルド員のイレーナ、ロートナイだ」

「ははっ固てえな！まっいい、ほれ早く中に入るぞ、外は冷えてしようがねえだろ」

「ええ、ではお言葉に甘えて」「すまない」

内装は外装と違い、見た目よりも機能性を重要視してるようだな。ここら辺はギルド員らしい。

「さて、そちらさんの名前は聞いたから今度はこっちが名乗る番だな。俺の名前はシュヴェルト・ガレアータだ。よろしくな！」

「宜しく願います」「宜しく願います」

「まっ挨拶もそこそこにちゃちゃっと本題に入るぞ。一応確認しておくよ、今回の依頼は不良チームを解散させることだ。チーム名は「カルトフェル」。規模は二十人〜三十人。今までは一般人に危害を加えたりしなかったんだが、最近ではここのマフィア共とつるんだりしてる。なんて噂も出るほどには迷惑を掛けてきてる」

「…ちよつとした不良集団から本格的な犯罪組織になりつつあると」「その通り。そして書いてあったと思うが厄介な事にこいつのリーダーが異能者と来てる」

「それなんだが…この、異能者の能力についてはどれだけ信憑性があるんだ？」

「おいおい、俺はいい加減な事は一切書いてない。能力については書いてあったので全部だ」

「ですけど、異能者の能力ってそんなあっさり分かるような情報じゃないと思うんですけど。っていうか名前まで分ってますし」

「あ〜なんだ、これはあんまり言いたくないんだが…実はこのリーダー、俺の息子なんだわ」

「へっ？」「はっ？」

「いや、恥ずかしい話なんだがな。このチームが出来たのはだ、俺の責任とも言えるんだよな」

「どういふ事ですか？」

「まあ自慢話なっちゃうんだが知ってると思うが俺はギルドでそこ

そこに活躍してだな、一時期は「剛塵剣のシユベルト」なんて呼ばれていた時期もあったんだ」

「…もしかして、それで親と比べられて言う…?」

「ああ、そのパターンだ。それでこいつが生意気な事を抜かした時にだな、俺も大人げなかつたんだが…こいつをぶち倒そうと思つたんだ。だけど結果はチームが潰れてねえ所から分かる通り、俺が負けっちまつたんだな、これが」

二つ名から察するにこのシユヴァルトさんは剣士なのだろう。だったら拳闘士の異能とは相性が悪い…と言うか拳闘士とか以外全部相性悪いか。

「親父が自分の餓鬼に負けるたあ全く情けねえ話だ…まあ話を戻すとだな、それを聞いた、ここらで屯つてた餓鬼どもがな?」

「続々とそのお子さんの所に集まつて…」

「チームの完成つつう事だな」

「異能者はその異能の事もあつて性根がねじ曲がり易い所があるからなあ…」

「何だ姉ちゃん、あんたも身内に異能がいんのか?」

「あ、ああ、弟が…」

「お互い苦労するよなあ姉ちゃん、まあこつちは俺に責任があるんだがよ」

「そんな事はないでしょう…ところで、奥方は?」

「おい、ルフト」

「あつ…すみません」

「あ?女房か?あいつが生まれて三年ぐらいで離婚したな、うん」

「…そうですか」

「まあそんな話はどうでもいいんだ。今日俺が依頼したのは解散と書いてはあるが成り立ちから分かる通り、このお猿の大将になつて粹がつてるバ力をこつ酷く叩きのめしやあ、チームは自然解散するだろう」

「…という事は実質この依頼は…」

「このご息子を打ち負かしたら終了という事か」

「ああ、そういう事だ。身内の事に他人を巻き込むのは嫌だったんだが、あのバカが自分のチームを掌握できてなくて、俺ならともかく街の奴等に迷惑が掛かっていると、なっちゃあな。俺のプライドなんて言ってる場合じゃ無いわな」

息子がチームに指示しているって言わない辺りに、この人が息子を信頼していることが分かるな。いかに、なんかありきたりな事を言ってるぞ、俺。

「そのプライドを折るっていう判断が出来るのは結構貴重ですよ」

「はは！そんな事はねえさ、俺は餓鬼一人賤けねえただの大ばか者だ。ほれ、此奴は彼奴らが屯ってる場所を地図に起こしたもんだ、持って行ってくれ」

「有り難う御座います」「忝い」

「それじゃあ、気を付けてな」

「ええ、息子さん。今日は泣いて謝って来るでしょうから、ごびつどく叱っておいてください」

「ははは！まあ期待して待っておく。おっと、油断はすんなよ！自慢じゃないが、うちのバカは手ごわいぞ」

「了解、それでは、お邪魔しましたと」「お邪魔した」

「おう、吉報待ってるぞー！」

後ろにそんな声を聞きながら、俺とイレーナは屋敷を出た。

そして、まだこの時はその息子を懲らしめる、ただそれだけだと思っていた。それが、あんな面倒臭い事になるだなんて。俺達は思いもよらなかった

「なんて、言ってみたりしてな」

「どうした？ルフト」

「いや、なんでも。さあ行こう」



## 第十話：拳闘士

「あれが例のリーダーですかね？」

「ああ、見た所その様だな」

あれから地図を頼りにあちこちの溜まり場をうろつき、今現在リーダーらしき人物がいる溜まり場の近くに隠れ潜んでいる。

溜まり場は結構広く、チーム全員を呼んでも余るぐらいの広さがあった。集会かなんかでもここでやってるのか？

それにしてもあのリーダーらしき人物：って言うかあれしかないなリーダー、親譲りのがっしりした体格は勿論、堀の深い顔、鋭い眼光、髪を逆立てた髪型まで：外見はまさにシユベルトさんが若くなつたらこうだろうと言つた感じだ。

「そう言えば聞きそびれてたんですけど」

「なんだ？」

「あの人の能力についてなんですけど」

「拳しか通さない、そうだろう？」

「いや、異能者って異能に縛られるっていうのも有名な話じゃないですか」

「ああ、そう言えばな。だが、今回に限っては聞かなくても分かるだろう。と言うかお前も答えみたいなの口にしてただろ」

「それって拳闘士に掛かつてる云々の話ですか？」

「ああ、拳闘士。つまり拳しか使えないと：まあ防具が付けられないって所だろうな」

「：でも拳以外通らないって言う能力そのものが防具みたいなものですよ」

「まあな、っでどうする？」

「どうするもこうするも、僕がリーダー、貴女が取り巻き：と言っても聞いてた人数よりもずっと少ないんですけど、そりゃいつも三十人ぞろぞろ引き連れてる訳じゃないんでしょうけど：」

「まあその方が都合がいいんだが…待ち伏せとかか？」

「いや、僕たちが来るなんて全然知らないと思いますよ？…まあ言っけてもしょうがないですし、行きましようか」

「そうだな」

イレーナは持っている剣に手をかけ、俺は拳にバンテージを…と行きたいがバンテージも駄目かもしれないので自粛しておこう。

「え、そこのリーダーらしき方」

「…誰だ？お前」

「まあとある方から依頼をされたギルド員です」

「ふん、で？そのギルド員さんがこんな場所に何の用だ？と言いたい所だが…最近うちの奴等が悪事を働いてることでどっかの負け犬が依頼したんだろうな」

「なっ…ディーガンさん！だけど、あれは…！」

「あれ？なんか事情があるみたいですね。だったらそれを聞いてからでも…」

「黙れ、こつちの話だ、部外者が口出すんじゃないよ」

「ディーガンさん…！」

「ふん、安心しろ。こんなひよろつちい奴、速攻でのしちまうからよ」

「…イレーナ、一応他の溜まり場を見に行ってくださいます？」

「どうしてだ？」

「ほら、増援とか来るかもしれないですし…それに…」

「それに？」

「この方はもうリーダーじゃなくなってるかもしれませんが？」

「お、おい！そこの！何寝ぼけたこと言っただやがる！」

「いやいや、取り巻きの人数がやけに少ない、うちの奴らが悪事を働いてる」「…けどあれは…」「部外者が口を出すな」「こんな事言っただら、この人が負け犬になっただけなのは明白じゃないですか」

「てめえ…！」

「そして…多分ですがここでもさして強くない下つ端に負かされたとかそれ位情けない話、じゃないとここまで人数は減らないですよ、ねえ負け犬デイーガンさん」

地が出てるが気にしない、今の俺は調子こいた餓鬼を説教する気分なのだ。ばれる可能性も上がるが…あんな気のいい人を…それ以前に自分の親を馬鹿にしたのがムカついてしょうがねえ。

「お、おい、ルフト…」

「ということなので、イレーナさんは他の溜まり場に行つて来てください。どこかの溜まり場にこの負け犬を引き入れる…もしくは完全に叩きのめそうとしてる奴等がいると思つんで」

「…了解・無理はするなよ」

「はは、こんな負け犬相手に僕が苦戦するとても？」

「…お前、どんどん向こうがヒートアップしてるの気付いて言ってるよな」

「何言ってるんですか、僕は本当の事を言ってるだけなのに怒るだなんて…逆切れもいいところですよ？そんな事する程彼も子供じゃないでしょ」

「…………はあ、もういい、頑張れよ！」

「…頑張るまでもないんですけどねつと！」

いきなり飛んできたストレートを、慌てて後ろに跳んで避ける。全く…

「行き成り人に殴り掛からないって習わなかったのか？負け犬」

「さつきから人を負け犬負け犬と…！」

「あ、分かるぞ、凶星を指されると腹が立つよな、ただどな？人間それをぐつとこらえて、はんせいっ！をつはっ！」

右のハイキック、左後ろ回し、からの右ストレートいただきました、いや、喰らっては無いんだけどさ。

「ペラペラしゃべってないで掛かってこいや！もやしい！」

「はん、クールキャラが崩れてるぞ、負け犬！」

まずは相手の動きを見切るところからだ…見た所速さも威力も長老

以下だが…

「くそつちよろちよると…！おらっ！」

「のわ！」

風切音を鳴らす左ハイキックに思わず大きくバックステップ、やっぱり実践だと…

「逃げんじゃねえよ！ビビり野郎！」

ビビっちゃうんですよ

「ねつと！」

「あああ！くそつ！」

ディーガンが拳や脚を使い攻めてくるのを、俺がひよいひよい…と言うほど楽ではないのだが、躲していく作業が少し続く。

ディーガンの呼吸が段々と激しくなり、スピードが落ちていく、しかもこいつ頭に血が上ってそこまで頭が回ってないな？

ビビったのが思わぬチャンスと呼んだな…ここで攻めるか。

足をワザともたつかせ隙を作る…あつやばい結構わざとらしくなった、引つかかってくれるか…？

「…！死ねええ！」

よし！怒りは人を狂わせる、短気は損気だ…！まあこの場合は短気じゃなくてもキレル気はするが。

とか思ってる間にもディーガンの脚がこちらの胸めがけて襲い掛かってくる。まあこのタイミングかな？

「変化… 根づく足”（ウォーゼル・エストレミタ）」

滅茶苦茶早く言い終え、足を地面にしっかり着け、膝をまげて上半身を後ろに倒す、手は地面に付けずにピタリと静止。胸を狙った脚が虚しく俺の目の前を過ぎていく。

「なっ！」

そう、いわゆるマトリックス避けだ…！…ってマトリックスって何？…

まあいい。

ネタを明かすと、俺の足の裏から植物の根を生やし、その根で体を支える事によってこの避け方を実現している。

俺の彼方此方の筋肉と靴にダメージを与える事によってこの技は成立している。もちろんこんな避け方するぐらいな他の避け方をした方がましだろう。

だが、この技利点が二つある。一つは相手の真正面に居れる事だ、まあこれは体勢が酷い事になるからあんまり意味が無い、そしてもう一つは

「動揺が誘えるんだよねっ」と!

「がっ!」

腹筋を総動員して、上体を上げ、勢いのまま頭突き!こっちは相手が怯んでる内に…

「よっ、おらっ!」

「ぐえっ、がぬっ!」

取り敢えず一発右ボディーブロー、丸の字になって下がった頭を押さえて顔面に膝蹴り、そのまま頭を放さず…!

「地面に顔面着陸っ!」

「げがっ!」

「デーガンさん!本気を出してください!確かに素手相手にはだめかもしれませんが…!」

「…う、うるせえ…!黙ってる…!」

ああん?本気を出してなかったのかよ。くそっこいつに手加減されたと思うと腹が立つ!

「おいおい、本気を出し渋ってる余裕なんてないだろうが、デー

ガンさんよお!」

「黙れ…!いくら俺にだって最低限のプライド位はある!」

「プライドねえ…まあいい、腹は立つがさっさとお前を叩きのめしてシュベルトさんの所まで引っ張って行ってやらあ」

「誰があのおくそ親父の所なんかに行かせられるかよ…!」

「おい、お前ら!早くここから逃げるぞ!

短いインターバルを挟んでの第二ラウンド開始!と言う所で、うちのセコンドが慌ててこちらにやって来た。

「どうしたんですか！イレーナ！」

「チームの連中が三十…いや四十は超えてこっちにやってくる、ここでは囲まれて不利になる！逃げるぞ！」

「チツ！と思わず舌打ちが出る。昂ぶる体は無視して目の前の奴をぶちのめせ！」と言ってくるが、冷えてきた頭はここは逃げる！と警鐘を鳴らす。

分ってる…俺はあんまり対集団は得意ではないのだ、それこそイレーナのように魔創剣が出来れば別…いや、それ以前に魔術が使えれば別だが、俺に使えるのは無属性の魔術のみ、それも不意打ちで使える位のレベルだ、まず役に立たない。

それはこいつも同じだ、拳しか通さないという能力は戦場では大いに有効だが、こんなちんけな不良の戦いで武器が出る事は滅多に無い、拳で殴り合うだけだ。そう、四十人が全員が拳と言うのが普通な状況なのだ、ならばここに居たらこいつもリンチに会って終わるだ。問ことはこいつも逃げるだろう。

此奴をこのまま逃がすのは癪だが、仕様が無い逃げるか…と此処まで一秒で思考した、まあ我ながら密度の高い時間を過ごしたものだ。「はあしょうがないで、逃げるのか！もやし」はあ？しょうがねえな…あのな？このままここに居たらな？お前の元子分達がわらわらとここに来るわけ、だから俺は逃げる。お前から逃げた訳じゃないわが「早くしろ！」はいはい分かりました！今行きますよ！」  
イレーナの言うとおりだ、話してないで逃げるとしよう。

### sideデীগン

「はいはい分かりました！今行きますよ！」

「なっまってっ痛」

声を上げてム力つく男を引き止めようとするが、顔の痛みで中断さ

せられる。

「あ、あの男の事はムカつきますけど、ここは逃げましょう！ディーガンさん！」

男はもはや近くにはおらずリベンジマッチは出来そうもない、ここで逃げると言う手もあるが、曲りなりも犯罪に手を染めてるのはうちの奴等だ、俺が逃げて、どうする！

「……………いや、逃げねえ」

「なっ何ですか！」

「つまらねえプライドだが、俺はあいつに負けた」

「だ、だけど……！あのまま行つてればディーガンさんが……」

「いや、あのもやしの長い台詞の間に頭が冷えてきた……多分、あのままやつても俺が負けてた……見ていたお前らもそう思ってたはずだ……」

「そ、それは……」

「いい、それが事実だからな……だが、だがな？俺がこのまま逃げずに今からここに来ると言う四十人を叩きのめしたらどうなる？」

「！それは……！ディーガンさんが……」

「いや、分ってるんだ、これが仮初の勝利……っていつとかつこつけすぎか……俺の自己満足って事に過ぎないのは、だけど、だけどだ」

「……ここで引き下がるのはプライドがゆるさねえ」

ついさっき聞いたような声が俺の声に被さってくる、と言うかこのムカつく声は……！

「もやし！どうしてここに！」

「もやし！じゃねえだろ！負け犬」

「……何しに来たんだ、尻尾巻いて逃げたはずじゃなかったのかよ」

「……負け犬の遠吠えが五月蠅かったんで、ついつい出てきただけさ」

「はぁお前ら、さつきからまあよくも恥ずかしい台詞をべらべらと……」

「いや、その場のノリっていつのがあるじゃないですか」

「行き成り、口調を変えるな気持ちが悪い」

「いやまあ、ただどこうやって正体隠してる的な言葉遣いは大事ですって」

「それがボロボロ剥がれて行ってるお前は、そういう系のキャラクター失格だな」

「はは、手厳しい」

「……こいつ等なんでこんなに余裕なんだ？」

「おい！ここに内の奴らが来るんだろ！なんでそんな余裕なんだ！」

「ああ、うるせえ、俺だって逃げたいのは山々なんだけど、イレエナが……」

「何を言ってるんだ、ルフト、お前が先に「助けに行くぞ！」って

……あつ……」

「……その「あつ……」がもう少し早く出て欲しかったですよ……」

「あ……その……すまん」

「助けなんて要らない、帰れ！」

「はあいやまあ、そう言うと思ったよ、だけどな？二十歳超えた大人が餓鬼ほっばいて逃げだす訳にはいかんでしょうがよ」

「誰が餓鬼だ！俺はもう十八だ」

「やつぱり年下じゃねえか」

「黙れ！これは俺達の問題だ、部外者は帰れ！」

「はあ、その辺は親父「おや？俺の知らない顔がいるなあ！ディーガンさん！おっと、もう「さん」は要らねえかぎや、はははは」なんだ？」

あのチンピラという言葉が最も似合う口調、全くにあつてない染めた金髪、あとの取り立てて特徴の無さ、もしかして……！

「シユバツハ……！」

「なんだあその顔は？ディーガン、俺に負けた元リーダーさんよお！ぎやははは……ははははあ、おい、お前ら！」

その掛け声とともにぞろぞろと人影が現れ、俺やもやしを取り囲む、七対四十の絶望的な喧嘩の始まるうとしていた。



## 第十一話：良い運動（前書き）

先に謝っておきます…ごめんなさい！>（　　）<今回、完全に勢いだけで書いてしまいました・

なので文体やらなんやらがとてつもなくおかしくなってるかもしれない！

だけど後悔はしてません・すごく楽しく書けましたから！

## 第十一話：良い運動

「どうだ？ディーガン？今まで、自分に従ってた奴に囲まれる気分はよお！」

「…ふん、別にどうもしない」

「はん、すかしゃがって…まあいい、お約束と言う奴だ、一応聞いといてやる…お前、俺の下に付く気はないか？」

「無い」

「だろうな、おい、聞いたか？お前らやつちまえ」

「だ、だけどシュバツハさん…」

「なんだ？俺の命令がきけねえのか？」

「い、いやそういう訳じゃ…ディーガンさ…ディーガン、ここは大入しくシュバツハの言うとおり…」

「するような奴だったらお前らはついて来なかっただろ？」

「だけど…！」

「はい、もういいか？このままだとまた話が長くなりそうだからここでカットだ、カット」

「なあおい、もや、なんだあ、お前は？」

「だからそうやって自己紹介する手間も面倒臭いからちやちやっとうちや」

「…チツ、どついう事だ？」

「俺とこの後ろにいる女でお前を除いた四十人をぶちのめす、俺達がぶちのめせたら、この負け犬ともう一度タイマンしろ、もしダメだったら、こいつ等を囲んで畳んじまえばいい」

「ぎゃははは！本気で言ってるのかてめえ？それを呑んでこっちに何のメリットがあるんだあ？」

「そうだな…よし、だったらこの後ろの女をお前にやる、それでどうだ？」

その言葉に、シュバツハの目が相手を見下す目から物色する目へと

変わる。予想外の事態があつたとはいえ、こんな奴に負けた自分自身に腹が立つ。

「よし…しようがねえその案に乗ってやる」

「おい！ルフ…！」

「ま、まあ落ち着いてくださいよイレーナ、四十人ここで叩きのめしたら何の問題もないんですから」

「二人でか！？」

「大丈夫、作戦はあります。おい、そこのチンピラと負け犬、あとその取り巻き、下がってろ」

「誰がチンピラだあ！くそっおいお前ら遠慮はいらねえ半殺し…いや、いつそ殺しちまってもいいぞ。おっと勿論男だけだ…女は…うひゃひゃひゃ」

…相変わらず、分かり易すぎる位に下種野郎だな。

「おいおい、面白い位に下種野郎だな」

「そんな事よりルフト、作戦は！？」

「それはですね…」

sideルフト

「それはですね…」

（まず、貴女が全力で出来るだけ大きな魔創剣で薙ぎ払ってください。い、ああ、勿論魔力欠乏症は起こさない位で）

（だが、それでは私はしばらく動けないじゃないか！それこそあの男に何をされるか…）

（大丈夫ですって、その後は僕が何とかしますから、安心してください）

（………分かった）

「おい、お前ら！何やってるさっさとやっちまえ！」

「だけど、何か話し合って…」

「そんなの知るか！作戦なんか決められる前にやっちなまえ！」

「やれやれ、それじゃあお願いしますよ」

「了解…」

「我らの手には余りしその力、今この時だけ剣となれ」子雷の巨剣

周囲の空気がざわつき、目を閉じて尚感じる程の光がイレーナの手から発せられる。その光に遅れて耳に届くは誰しも一度は聞いたことがある自然の怒号、つまりは雷鳴。

イレーナの右手に握られていたのは巨剣の名に恥じぬほどの大きさの剣、その長さは近くの家の屋根を軽く超えていた。

おいおい、本当に魔力欠陥症とかいう奴に掛かってんのかよ！？とても、五歳児レベルの魔力量じゃあこんなのは…

「はあはあ…避けるよ！ルフト！はあああああ！！」

「うわっ！」

伏せた途端俺の上僅か五センチを雷剣が通り過ぎていく。伏せた状態から僅かに見える、映像は雷剣に飲まれていくカルトフェルのメンバーの姿だった。…ん？飲まれてるってことはこれ創成魔術じゃないのか…道理で五歳ぐらいの魔力量で…ってそれでも十分おかしいぞ。

「はあはあはあ…ふう…あとは…はあ…頼んだぞ」

「はい、任せてください。って欠乏症なってるんじゃないか…」

「大丈夫だ…はあ…一気に魔力が無くなったから…体が動かないだけだ…」

「ならいいんですけど…まあゆっくりしといて下さい」

流星にあれだけの人数いると全員が雷剣に飲み込まれて倒れた訳ではなく、俺と同じように伏せて避けたのちちらほらと残っているのが分かる。

…大ざっぱに十人って所か？しかも、いい具合に右左に五人ずつぐらいにばらけてやがる。…都合主義もいいところだな。

「おい、お前ら！女は動けねえみたいだぞ！そんなひよろい奴さつさと倒しちまえ！」

「……りよ、了解！」

さつさと倒しちまえ：ねえ。

「残念ながら：伏せてる間に少しは溜めれたんだよね：圧縮……」  
蹄ツオッコロ・ガードンの庭”」

いやまあ格好つけた所で両脚を圧縮して、小出しにするだけの技なんですけどね？

まずは右脚を解放、左前に跳びながらの左肘を鳩尾に：「かはっ！」  
まず一人。

次に左脚、右後ろに跳び、右肘を顔面に打ち込む：「めぐっ！」  
これで二人。

さあさ、交互に行こうか。お次は右脚、左にまっすぐ跳んで腕を真直ぐ、顔を殴り飛ばす：「ばべ！」  
よしよし、三人。

次は左：と言いたい所だが、もう一人が近くにいる、呆気にとられてる好きに右の裏拳を顔面に「がっ」、さらに怯んでる隙にくると回り、左脚を空に高く掲げ少々恰好きこちないかかと落とし：「がっ！」

残念ながら脚の溜めはもう無い、だが誰が貯めたのは両脚だけだと言った？両腕を大きく広げ握り埋めた小石を撃つ：「だけ！」  
「ぐな！」  
これで六人。

大きく左に動き、残る二人を一直線上に並ぶようにする。

後は両腕を再度圧縮しつつ全力疾走！  
淡々とやって来ているがそろそろテンションは最高潮！！

両腕を真直ぐ伸ばし、こちらを振り向こうとしている胸板に当てる。  
もちろんこれだけじゃあ威力は全然無い、だからここで

「飛べ！」  
掌底”破城撃ち！！”

車に轢かれたかのごとく、体が吹っ飛び、直線状にいるメンバーを巻き込み尚も吹っ飛ぶ。やばい、やり過ぎた……まあいいか。これで八人、思ったより少なくて良かった。

「だけどもあ…久しぶりに良い運動だな、こりゃ」

「なっ、なっなんなんだあ！？お前は！」

「はいはい、そういうのもカットなカット。ほら、お膳立てはしてやっただぞ、俺に感謝の言葉を言いつつさっさと倒しちまえ」

「…すまない」

「…素直に言われるとなんかこっちが悪いような気がしてくるな…ま、まあいい。おい、その」

「なっ、なんだよ」

「約束だ、さっさとタイムンして負けちまえ」

「お、おいその前に約束しろ、俺がこいつに勝ったら、見逃してくれ！頼む！な？」

「そんなの了承するわけねえじゃねえか、ほらさっさと始めろ」

「な、なんだその言い方はど、どっちにしる俺は…」

あゝ面倒臭い。こう言いだすのは大体予想通りだったけどこうまで往生際が悪いと本当に腹が立つ。

「ギルドに依頼が来るような事をしてるお前らが悪いんだよ」

「う、うるせえ！」

「ルフトさん、もういいだろ、此奴と話しても無駄だ」

…さん？…突っ込まない方が良い様な気がする、ここはスルーだ。

「あゝそうみたいだな、ほら、お互い用意はいいか？」

「俺は問題ない」

「く、くそが！」

負け際のチンピラのセリフを吐きつつ、チンピラが懐からナイフを取り出す…ん？あれは…

### sideデーターガン

…さっきの、喧嘩…いや、一方的な暴行はなんだ？

餓鬼やら負け犬やら言っ て来られていたが、”あれ”にそれを言う資格があるのは間違いないだろう。

「一体”あれ”はなんなんだ？魔術を使っているのは間違いない…恐らく属性は風…だが、右に居たかと思えば左に、左に居たかと思えば右に、あれほどの間髪なしに、どうやって動いているのか全く分からない。」

そして最後に放ったあの技、あれほど分かり易い動きなのに全く魔術の発動した瞬間が分からなかった。

「いかん、今はそんな事を考えてる場合じゃない。あいつは四十人を宣言通り倒した、という事は…」

「けどまあ…久しぶりに良い運動だな、こりゃ」

「良い運動？あれで…こいつにとつてのキツイ運動ってなんなんだ？」  
「なっ なっ なんなんだあ！？お前は！」

「はいはい、そういうのもカットなカット。ほら、お膳立てはしてやったぞ、俺に感謝の言葉を言いつつさっさと倒しちまえ」

あんな光景を見せられては、こっちも負けを認めざるを得ない。

「…すまない」

「…素直に言われるとなんかこっちが悪いような気がしてくるな…ま、まあいい。おい、その」

「なっ なんだよ」

「約束だ、さっさとタイムンして負けちまえ」

「お、おいその前に約束しろ、俺がこいつに勝ったら、見逃してくれ！頼む！な？」

「そんなの了承するわけねえじゃねえか、ほらさっさと始める」

「な、なんだその言い方はど、どっちにしろ俺は…」

「ギルドに依頼が来るような事をしてるお前らが悪いんだよ」

「う、うるせえ！」

「ルフトさん、もういいだろ、此奴と話しても無駄だ」

「あゝそうみたいだな、ほら、お互い用意はいいか？」

「俺は問題ない」

「くくそが！」

そんな、チンピラな台詞を吐きつつ、俺にとっては苦々しいものとなるナイフを取り出す。

「お、お前はこのナイフさえあれば、簡単に倒しちまえるんだ。ちよつと強い助っ人よんで、いい気になってんじゃねえぞ！おい！」

「今度は…勝つ」

「やる気あるな、お前ら…んじゃ、ほい、始め」

そんなやる気のない声で俺のリベンジマッチは始まった。



## 第十一話：良い運動（後書き）

どうも、今回非常に反応が不安な生意気ナポレオンです。  
今回、如何だったでしょうか？ほんの少しでも面白いと思ってもらえたらうれしいのですが…  
まあ何はともあれ次回はディーガン対チンピラです、どうかよろしく願いたします。  
では、ここまで読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。

## 第十二話：ナイフ

「ちえや！」

そんな掛け声とともに、右腕に構えたナイフで突いてくる。

まあ動きが見え見えなので左に上半身を傾けあっさりとそれを避け、

「ふっ！」短く息を吐き出しつつ、右拳で顔面を狙う。

だと言うのに、シュバツハは避ける素振りも無い、それどころか余裕綽々でこちらの拳を見るのみ。

：俺自身分っている、今にもあたるうとして、右拳の無意味さを、これが当たるならこんな雑魚に負けるわけがない。

ガキイ！と前と同じように硬質な音が響き、拳はシュバツハの顔面に当たる前に”何か”に阻まれる。

それならばとナイフを奪うために右腕を掴もうとするが、同じように”何か”に阻まれ振れることすら出来ない。

「へへっ前回と同じだなあ、ディーガンさんよ、んじゃあ自分がどれだけ弱いかわかめて貰った所でえ死ねや！」

目の前にあるシュバツハの体が急にブレ、その姿を見失う。何処に行った！？

「っ痛！」

「ひゃひゃ痛いかな？痛いかな？ひゃひゃひゃ！」

いつの間にか、シュバツハは俺の右側に現れ、俺の右肩に深々とナイフが刺していた。

s i d e l f u t

「やる気あるな、お前ら……んじゃ、はい、始め」

そんな感じに始める位に最初はやる気が無かった。

それ位、デイーガンの勝利は目に見えていたからだ。

勿論、前回負けたという事も含めてだ。俺は前回のデイーガンの敗因は、油断や慢心、もしくはチンピラが下剤を持ったなどそんな物だと思っただい。

俺は見誤っていた。そう言わざるを得ない、それと同時に言わなければなるまい、デイーガンに限り、相手があのナイフを持っていたならば負けたのにも無理はないと。

「な、なんなんだ！？あのナイフは！デイーガンに…いや、拳通士」に刃物が…！」

「ええ、そうですね」

「な、なんだその反応？まるで分ってみたいなあ…」

…ここでとぼけるのは容易いが…どうするかなあ…

「…分ってたからです」

「な…！だったらなぜデイーガンにその事を…！」

「デイーガンは一回負けてるんでしょう？それなら最初からわかってたはずですよ。あのナイフが自分に”通る”事も、自分の拳が”通らない”事も」

「お、おい、今なんて言った…？あのさつきからデイーガンを止めている”何か”もあのナイフの所為なのか？」

「…ついでに言えば急にあのチンピラの動きが速くなったのもナイフの所為ですよ」

「あれもか！？いつたいどういう事なんだ！ルフト！」

これを言ったら、俺に疑惑が掛かる可能性があり、言わなければデイーガンは死にはしないだろうが重体一体何のために出てきたのか分かりやしない、骨折り損のくたびれもうけ、おまけに相棒からの信頼は無くなる。

言わなかったら一つのメリットに二つのデメリット、言ったら一つのデメリットに二つのメリット、どっちを選ぶかは一目瞭然だ…と自分に対して言い訳してみる。

「……………あのナイフには魔界側の魔術が掛かっています」

「なんだと、どういう事だ!？」

「ゆっくり説明してる時間がありません!…今からちよつとだけお節介を焼きますよ」

「その指指し貫くは罪、指し示すは道、貫き示せ!」詠唱と共に俺の人差し指にじわじわと魔力が溜まって行く…ああまだか!?!…よし、これだけありやあ大丈夫だろ!」「一刺し指!」トウレ・ツェーレ」

指の先端から魔力そのまんまが発射され、シュバツハのナイフに当たる…

俺が使える数少ない無属性魔術の一つ”一刺し指”、こんな時にしか役に立たない術だ、

なぜなら…

「…何かしたのか?」

「しましたよ」

「何も起こってないではないか!」

「大丈夫です、今の魔術は武器から魔力だけを取り出す呪文ですから」

「魔力だけを?どうやって!?!」

「それはディーガンにも話したいんで後で説明しますから!ほら、ここからはディーガンの一人相撲ですよ」

### side ディーガン

くそっ痛てえ…!右肩を刺された俺は前回と同じようにバックステップで大きく距離をとった。だが、前回と今回では距離をとる意味が違う。

前回は様子を見る余裕などはなく、刺さったと言う事実<sup>に</sup>動揺し、恐怖し、そして、逃げた。ビビって逃げた後、恐怖が過ぎ去り、変

わってやって来たのは羞恥に屈辱、自分に対する怒り色々な物がまぜこぜだった。

思えば、奴らが俺を離れて行ったのも当然だ、ビビって逃げる…しかも”拳通士”なんて能力を持つてるとか言いつつ、ナイフが刺さったリーダーなんて誰もリーダーとは思えない。

「あゝんまた逃げるのかあゝ？ぎやはははは！」

前回は逃げた、だが…今回は違う。くるりくるりと奇妙な動きでこちらに迫ってくるシュバツハ前回は逃げる事に必死で全く分らなかつたこの動きが、冷静に見ればすぐにわかる。

動きこそ速いものの、この動きは円に近い規則性のあるものだ。だったら動きは読みやすい、動きが読みやすいっていう事はつまり…

「ひやは！」

「攻撃が読みやすいってことだ！」

視界からシュバツハの姿いきなり消える、だが、円の動きという事は、奴の出現範囲は俺の身体を軸にして百八十度以内、だったら前に奪取すればいい！

「なっ！」

自分の攻撃が避けられたのを信じられないと言った顔をしている。ふん、この顔を見ると少しは胸がすつとする。

だが…「はあ！」ガキィ！「チツ！」

相変わらずこちらの攻撃は通用しない…避けられてもこれでは意味が無い。

「ちつム力つくが、こつちに攻撃はできねえんだ。じっくりといたぶらせても…な、なんだ！？」

ん？どうしたんだ？こいつ急に慌てだしたぞ？

「おい！何をぼさつとしてる！そんな隙だらけの奴、さつさと殴り倒しちまえ！」

「つていたつて…」

「取り敢えず殴ってみねえと始まらねえだろ！」

「りよ、了解」

「はっ…お、おいちよ、ちよっ…」  
「あ、あれ？普通に殴れたぞ…これは…チャンスだな。」  
「い、痛てえ！…お、おい、どどど、どうしたんだよ、くるなくるなああああ！」

sideルフト

俺がナイフの魔力を飛ばした後を書くとするはこうなるだろう。  
ドカ！バキィ！メキィ！ゴス！ボキィ！（恐らく骨が折れた）ドグ  
ッ！…

我ながら擬音で全てを表現するのはどうかと思ったが、こう表現するのがふさわしいだろう…多分。

これで一件落着…と言いたい所だが…

「チームの解散、これが目的となるとちと面倒臭いか…」

「そうだな…どうする？」

「うーん、このままディーガンがリーダーに復帰して…それを僕が倒してリーダーに、そして、解散へ…っていうのはどうです？」

「…若干せこい様な気もしないが…まあそれが一番だろうな」

「うーん、だけど問題はリーダーに復帰できるかどうかですよ」

「どういう事だ？」

「いやああの恨みの込めっぷりただ負けただけじゃないと思うんですよ…ちよっと話を聞いてきます」

「おい、大丈夫か？」

「大丈夫ですよ」

「なるほどねえ…よし、だったらその屈辱俺が晴らしてやる」

「？こいつならもう叩きのめしましたけど？」

「ふん、それだけだったら逃げたっていう事実は変わらねえだろ、

いやまあその事実はどうしたって変わる事はねえが…その逃げたつていう事に正当性を持たせりゃあ問題は無い」

「騙すって事ですか？」

「いや、事実を伝えるのさ。ほれ、お前のチームだろ。さっさと全員叩き起こして整列させる」

## 第十二話：ナイフ（後書き）

どうも、生意気なポレオンです。  
今回…正直、全然考えたことを文章に出来ませんでした。  
いや、本当にもっととすつきりとした感じになる予定だったのに…  
分ってたことですが要精進です…



### 第十三話：熱弁

「さて、どうだ。お前ら目が覚めたか？」

「くそっ…なんなんだよ…お前らよあ…」「うう…まだ体が痺れてやがる…」「おい！アスぺ！お前水の魔術使えたよな、こつちに来てくれ！」

「…目は覚めてるみたいだな。それじゃあ…」

「おい、この状況で話しても仕様が無いだろう。落ち着くまで時間が掛かりそうだから、今から何をする気が説明しろ」

「まあ簡単に言っつてしまえば…今目の前にいる奴らの説得ですよね」「説得…確かにディーガンと話していたが…どういう事だ？」

所謂かくかくじかじかと言う奴で説明中だ、ちよつと待つてほしい…「…と言っつ訳なんですよ」

「成程…だから説得か…だけどルフト、それってディーガンがしないと…」

「やっぱ不味いですよね…」

そう、部外者の俺がここで口を出したらそれこそディーガンはリーダーと認められないだろう、格好つけて「いや、事実を伝えるのさ」云々と決め顔で言っつた過去の自分を叩きのめしたい。

「まっ…そんなことは出来ないから…どうしましょ？」

「無難なのはディーガンにアドバイスするぐらいだが…」

「うーん、あんまり口が上手くなさそうですからね…彼奴」

「だったら、どうする？お前が出しゃばるのか？」

「……………」

はあ…何を感情移入してるんだか…多人数対少人数、一方的な暴力…少しでもスライム族の境遇と被るとすぐにこれだ…小説を見ててもこれだもんな…そりゃ長老があれだけ心配するわけだ。

大体、ここで彼奴をリーダーに返り咲かせるのに意味はない、むしろ面倒臭くなるだけだ。ここで放っておけば勝手にリーダーは決ま

る、それもディーガンよりは間違いなく弱い奴が、  
ここで出しゃばる必要は無い…と云いたい所だが…  
「ここで逃げたら恰好がつかないですよね」  
「ふん…出しゃばる大義名分は？」  
「無い、けど仕様が無いでしょう、どうにかするしかないですって」  
「はあ…もうどうとでもしろ」  
「そうさせて貰います」

「で、話ってなんだよ！ディーガンさんよお！」  
「失望したぜ、あなたにはよお！」  
「大体、ちよつと切れたぐらいでどんだけビビってたんだよ！」

「ディーガンさん…」

「…全部事実だ、俺にはなんも言えねえ…」

「おいおい、ここでビビって何が悪い位言えるようになって…  
神経が細いと人を引っ張るのは辛いぞ？」

「ルフトさん…」

「まっここは俺に任せときな」

精いっぱい格好を付けて、四十人の集団の目の前に入る。四十人の  
圧力に脚は竦み、体は弛緩し、声が震えそうになる。

情けないと言わないで欲しい、ここ最近は一切そんな素振りは無かつた  
ただろうが、そもそも俺は人間が怖い。

いくら今は人間と対等に戦えるからと言って、十七年間の最弱生活は  
体に染み込「おい！何黙ってんだ！」…モノローグを邪魔するな  
よ。

「なんで俺がここにいろかと言うとだ、後ろで黙ってるバカの弁護  
の為にだ」

「はっ！自分ではじめを付けずに人に任せる…堕ちたもんだなあデ  
イーガン！」

「まあそれは確かにそうなんだが…彼奴にもだな見栄っていうもの  
があるんだよ」

「見栄？あんな逃げ方をしておいてか？」

「そう！そこなんだよ・俺が言いたい所は」

「はあ？何を言う所があるんだ？お前の言う後ろのバカが見つとも無く逃げたのは周知の事実、それをどう言い訳するつもりだ！」

「いんや、見つとも無く逃げたの事実：としか当事者じゃない俺は言えない」

「だつたら何を！」

「その時の此奴の心情だ」

言いながら、デイーガンを指さす。そう、当時のこいつの心情をどれだけ明確に伝えられるか：それが今回の肝だ。

「心情：？そいつはナイフに恐怖した、それだけじゃなねえか！」

「察しが悪いな：その恐怖の度合いが重要だつってんだよ、俺は「恐怖の度合い」？」

「馬鹿丸出しだな：はあ、良いか、お前らの知つての通りこいつは「拳通士」：拳以外を通さなかつた、これがどういう事か分かるか？」

「ああ？武器で攻撃されても効かねえそれだけだろ？」

「違う！」

「な、なんだよ、いきなり大声出すんじゃねえ！」

「良いか、此奴は」拳以外通さなかつた”んだぞ？つまりは、転んだ、頭をぶつけた、紙で切った、指を挟んだ、火傷した：その他諸々・俺達なら子供のころで味わっている事をこいつは殆ど経験してないんだ！思えば”異能”これ程ピッタリな言葉もないよな。”拳以外を通さない”確かに便利な能力だが、その分経験を：いや経験どころじゃない、恐怖：つまりは危機感を無くす。いわばこいつは才能ある大きな赤子だ。長々と高説したが、簡単に言うのだ：此奴の当時の恐怖は”理性、知識持った赤子が急に未知の痛みを味わう”：俺達に当てはめるなら”神話上でしか見たことも無いような怪物が現れる”って位の衝撃、恐怖だつたわけだ：それならお前：逃げるのも当然と思わないか？」

「くっ…！」

「俺にはとてもじゃないがいきなりそんな事が起きて、逃げださず戦う勇気は無いなあ…でっ？お前らはそんなことが出来るのか？」

「そ、それは…」

「出来るのか？」

「じ、実際に出てこねえとそんなん分かるわけねえだろ！」

プチツそんな音が頭から聞こえたような気がした、落ち着け…落ち着くん…ここで”大狼”に変化してやるうかなんて思うんじゃない…

「なんだ？その言い様、想像できない？甘ったれてんじゃない…その”想像できない事”をあいつを襲ったんだぞ！」

「さつきから聞いてりゃあべらべらと…部外者が口出すんじゃないよ！」

「はあ、おいおい、それ自分達の首絞めてんの分ってる？お前は俺の事をこう言ったなあ”部外者”だと、だとしたらお前らはその”部外者”よりも自分のリーダーについて何も知らない、何もわかっていない…”チーム”？笑わせるんじゃない、ただお前らがディーガンに寄生してただけだろ」

「言わせておけば…！おい、此奴を倒した奴が次のリー」

「言葉で勝てないと思ったら次は実力行使か？やれやれ、割に合わない仕事だなあ…」

両腕からナイフを取出し…、っていい加減マンネリなんだよな…この展開、なんか変化を使う良い言い訳ないかな…

「お前ら…今度は怪我じゃ「死ねえええ」聞く気無いわなあ…」

三十分後

「で…結局挑んできたのは何人なんだ？ディーガン」

「三十四人です」

「殆どじゃねえか…ディーガン君、遊ぶ友達はもうちょっと選びなさい」

「それ、親父にも言われんですよ…」

「だろうな…？お前らはどうするんだ？」

「お、俺達はディーガンさんについて行くつもりです」

「そして？また寄生するのか」

「いや…今度は”チーム”なんてものにならず、ただの友達で…上下関係なんて無く、やっていければ…上手く言えないけどそんな感じなんです。俺も、他の奴らも」

「いや〜若いね〜そういう台詞はもうおじちゃんには言えないな〜」

「はぁお前はこういうキャラクターで行くつもりなんだ」

「さて、何のことでしょうか？」

「だから急に言葉づかいを変えるな、気持ち悪い…いや、そんな事よりもだ、お前、困まれた時私の魔術要らなかつたんじゃないのか？」

「い、いやそんなこと無いですよ？ほら…そう、あの時の傷やら痺れやらが残ってるお陰で勝てたんですよ」

「正直に言つと？」

「面倒臭かつたんですよ」

「貴様…！」

「まっこの前の洞窟の件をチャラにしますから許してくださいよ」

「うぐっ…はぁその件を言われると弱いなあ」

「これでお互い貸し借り無し、すっきりじゃないですか」

「…そういう事にしとくか」

「さて、ディーガン」

「…何ですか？」

「そろそろ三者面談の時間だな？」

「…如何してもですか？」

「当たり前だろ？俺の報酬に…君の将来に関わる事だ、疎かにしてはいけない」

「行かなかったら？」  
「勿論ここでふんじばってでも連れて行く」  
「分かりました、行きますよ……」  
「それが利口だ、ほれ、行くぞ」  
「了解」

#### 第十四話：凱旋？（前書き）

すみません！>（――）<

「第十二話：ナイフ」にて、訂正前と訂正後の文章が混じって居りました。

その所為で文章としても、流れとしても無茶苦茶な事になっていました。

本当に申し訳ありませんでした。

## 第十四話：凱旋？

「ところでルフト、結局なんであのナイフはディーガンに当たったんだ？」

「えっルフトさん分かるんですか？」

「ああ、なんかお前が戦ってる時に言ってたんだ。しかし、異能を突き抜けるとは…さぞかし凄い魔術が掛かってたんだらう？」

「…うーん、凄いですけど変ですね」

「変？」

「はい、あれには三つの魔術が掛かってました」

「まあ正確に言うと”概念”なんだが…そこ言い始めたら長いし、そこまで詳しい俺は何者？って話になるからね。」

「三つもか！？それで？どこが変なんだ？」

「そうなんです、僕も三つも魔術が掛かってるのは凄いなと思うんですよ、なんですけど…掛かってるのがなく」

「何なんだ？」「何なんですか？」

「”拳”、”包帯”、これが説明しづらいんですが…”コンパス”です」

「拳？壁？それにコンパスだと？お前は何を言ってるんだ？」

「えーとですね…僕も魔界に詳しい訳じゃないのでよく分らないんですよ、すいません」

「それじゃあ、どっという理屈で当たってたのかわかってないんですか？」

「いや、それは分かる」

「さっきからお前歯切れ悪くないか？」

「そ、そんなこと無いですよ。まあそれよりもなんであたってのかわりたいんでしょう？ここであんまり突っ込まないでくださいよ」

「す、すいません」「…りょうかい」

「いきなりなんですけど…このナイフは”拳”です。そして、”包帯



”を創っていて、コンパス…の”針”にもなります」

「……………訳が分からんぞ」

「ええ、俺も分かりません」

「いやまあそうですね。うーん、なんて言ったら良いのかな…」  
大体だな概念魔術自体説明し辛いのに、それ無しで説明しろっていうのに無理があるんだよな…はあなんで俺あの時血迷ったかなー

「そうですね…まず、”拳”に関してなんですけどこれはこちらの魔術で言う所の”擬態”に近いですね」

「擬態？周囲の物に成りすますと言われてるあれか？」

「ええ、そうですね。その進化形と言ってもいいでしょう…この”拳”の魔術は、このナイフを拳に成りすまさせてるんですよ。見かけでは無く本質を」

「な、なんとなく分かる様な分からない様な…」

しかし気になるのはなんでこのナイフが”なんで切れたのか”と言う所だ、概念魔術は概念に縛られるはず…拳のはずなのになんで切れたのか…考えても仕様が無いが…

「ルフトさん、どうしました？」

「いや、なんでもない。と言うか気になってたんだがなんで「さん付けなんだ」

「い、いや囲まれた時の戦いぶりを見たらこう…なんかぐつと来ちゃいまして、あっそっちの気は無いですから安心してください」

よ、良かった、「ぐつと…」の時点で全力で圧縮してたこの脚を使わずに済む…

「まあ…年上を敬うのは良い事だよな」

長老から一番…とは言わないが何度も聞かされた言葉だ。しかし今の様子を長老に見られたら間違いなく、強制的に里に戻されるな。

「…”拳”に関しては良いとして…」

「良いとして良いんですか？」

「良いんじゃないんですか？」

「良いのかなあ？」

「良いじゃないですか、別に」  
「良いとしますか」  
「良い加減にしろ！じゃなかった…好い加減にしろ！」  
「これなんで会話でこれできてるんだらうね」  
「とにかく続きを頼む」  
「はいはい、ええと次は”包帯”ですね。これが一番凄い所なんですよ」  
「へえ…どういう所がですか？」  
「これはですね”包帯”と言う魔術に”ナイフ”を混ぜてるんですよ」  
「またそのパターンか…」  
「はは、どうもすいませんね。あーつまりですね、ナイフは固いですよね？」  
「そうだな」  
「包帯は軽く、巻けますよね？」  
「そうですね」  
「その固いという事と、軽くて巻けるという事を混ぜて使ってる訳なんですよ」  
「要するに？」  
「固くて軽くて巻ける包帯って事です」  
「それって都合よすぎないですか？」  
「そう、都合がよすぎる、だから一番凄いつて言った訳だな」  
「成程な…」  
「さて、最後は…」コンパス”ですか…」  
「うん…なんかもう聞かなくて良い様な気がしてきた」  
「僕も話すの面倒になってきました」  
「俺は一応聞いておきたいんですけど…」  
「まあここまで来たことだし話すか…この”コンパス”はだんなこのナイフを”針”と見なして、自分を鉛筆の方に見なす」  
「…はい、想像できました」

「そしたら後は簡単だ、針を中心…つまりはナイフを中心に戻るだけ・と言っても半径は腕の長さが最大、大して移動は出来ない・多分”包帯”に力過ぎ過ぎてやる気失くしたなこのナイフの作者」  
「…そんな魔術に不意をとられてナイフを刺された俺ってなんなんですかね？」  
「…なんなんだろうな」  
「おっ屋敷が見えてきたぞ」  
「なんか俺もう疲れてるんですけど」  
「俺もだ、なんか疲れた…」  
「ほら、愚痴ってないで行くぞ」

### ガレアータ邸

「おお、疲れただろう！まあ上がれや、あつオイそこの馬鹿は暖炉の薪がねえから薪割してから来い、それと風呂掃除と皿洗いに犬の散歩を一週間、それで勘弁してやる」  
「……………すまねえ」  
「そこは御免なさいだろ、馬鹿」  
「いいんだよ、ルフト、こいつはこれ位じゃないとこっちが落ち着かねえ」  
「まあそれでいいなら良いんですけど…ああー…嫌らしい話なんですけど…」  
「報酬だろ？ほい、ご苦労さん」  
「有り難う御座います」  
「ところでおまえさん、あいつとやり合ってたんだろ？どうだった？」  
「うーん、正直そこまで強くなかった気が…」  
「…おい、あのバカとどうやってやり合った？」  
「普通に殴り合いですけど…」

「は、あのバカはまだそんな事をやってたのか。ルフト、お前には悪いがディーガンともう一度やり合ってくれねえか？」

「えっできればご遠慮したいんですけど…」

「まっそれはそうだろうな。うーんだったら。そうだな追加報酬を三万出そう、それでどうだ？」

「まあ報酬が出るんならやってもいいですけど。なんでですか？」

「あー。こういうと親バカなんだがよ。彼奴の実力を見誤ってほしくねえのさ。」

「実力？」

「ああ、実際やり合ったら分かるだろう。伊達に俺を倒したわけじゃないんだぜ？」

…そう言えば、「本気を出してください！」とか言ってたな。

「了解。こつちも気を引き締めたやらせて貰います。」

「それじゃあ、明日またここに来てくれ。その間に準備済ませとくから。」

準備？…ああ、怪我を治すって事か。

「ええ、ではまた明日。」

「…私要らなかつたんじゃないのか？」

「…それじゃあイレーナ、お邪魔しましょう。」

「邪魔どころか発言して「お邪魔しましたー！」…失礼する。」

「おう、じゃあな。」

### 次の日ガレアータ邸

「あの時の準備ってこれか…」

「…凄い人数だな。ルフト。」

「ええ、うんざりする程…」

次の日、ディーガンとの対決の為、ガレアータ邸に行った俺達を出

迎えてくれたのは、そこら中の人、人、人だった。

「おっお前らやつと来たか！」

「シユヴェルトさん…どういふ事ですか？」

「いやな、あの後考えただけだよ。折角面白そうな事があるのに、俺とそこの姉ちゃんだけが観戦つていふのは寂しい、だったら人を呼ぼうつてな」

「あそこで入場料とつてるのは？」

「あれは依頼料の足しにするためだ」

「…入場料ですか…子供五百リズで大人は千リズ、どう考えても依頼料よりあるじゃないですか」

「…チームを件の出費の所為で新しい車を買えなくなつてな…」

「我慢しろよ、それ位」

「おилフト、良いじゃないか、依頼料は貰えるのだし」

「………そうですね…と言つかなんで貴女も来たんですか？」

「…お前がいなかったら私に出来る仕事など…」

「途端に腐るの止めてくださいよ、貴女剣も普通に使えるでしょ」

「まっそうだがな、昨日今日と二日連続できつい仕事が続いたからな、休暇だよ、休暇」

「その休暇に僕は見世物になるんですけどね」

「まだ言つてるのか」

「おい、ルフト！早くこつち来ーい！」

「はあ…りょうかい」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4297y/>

---

人魔のはみ出し者

2012年1月2日01時50分発行